

2022年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

夏きざす木を態と為し仁王尊

仁田 浩

豆植うや豆飯用を三粒ほど

小畷 和

この中の幾つ実となる柿の花

中島冬子

川魚の鱭のひらりと夏兆す

朝田玲子

駆けぬくる少年の香よ更衣

牧田満知子

昼時の村の静けさ柿の花

佐々木成

青嵐吹きゆく先の大伽藍

中井昭雄

湯上りの髪そのままに夏の月

森 壹風

大潮の礁をかすめ岩つばめ

鴻坂佳子

モンゴルの茶や羊乳と麦こがし

丹羽康夫

はんざきの川下り来て爆心地

田中 勝

駅舎より高さあふちの花の空

西五辻芳子

真鶴湾「お林」が糧夏の海

富沢壽勇

ベランダのもの薬味とし初鯉

石原ゆき子

よろづ屋に団扇の束の並び出す

谷口文子

釣船の常連となり親鴉

大石高典

水切りの波紋に遊び雲の峰

碓氷芳雄

薫風や並木の影のキッチンカー

片山旭星

青東風や伏し目がちなる道祖神

立石律子

氷室集

白服を着て白服の人と会ふ

仁田 浩

小満やぽんと栓抜く音のよき

朝田玲子

聞き慣れぬ鳥の声して青岬

川内一浩

水芭蕉この期ひぐまの好物と

浅利美鈴

一樹より一瓶のジャムさくらんぼ

西五辻芳子

船頭が目打にくねる穴子かな

大石高典

夏めくや竹皮鞣しばれん編む

牧田満知子

筍の瓶詰に精出しにけり

奥野千秋

干拓の植田千枚光り合ふ

佐々木成

逆上りに青空近し百千鳥

福のり子

暮れ残る花桐高き屋敷林

福江ちえり

食堂の亭主見守る燕の巢

片山旭星

走り梅雨高く積まれし無縁墓

大野邦夫

初夏やふつと寄りたる鳩居堂

谷口文子

岩魚の酒かをりに酔うて箸を置く

鳥居裕子

麦秋や片手に余す塩にぎり

森 壹風

薫風や声よく通るつづら折
嗅覚の戻り試しの鰻食ふ
風薫る子どものときの朝のごと
風薫る視力よき日の文庫本

鴻坂佳子
富沢壽勇
小 和
山本京子

2022年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

朝まだき遠き比叡の棚霞
蛸の子を近頃は見ず白子干
牧野翁像の佇む庭や春
島煙る紀伊水道の卯月波
風垣を解くや展けし日本海
春愁やマトリョーシカはみな笑顔
薇の綿毛を糸に奥羽なり
春暁や愛宕の山に雲三筋
階段を自転車担ぐ遍路かな
砂いろの貝もぐりこむ潮干狩
草萌や主審墨審入れ替はる
人混みにネクタイ緩め春暑し
須弥壇の天武天皇松の芯
リズムよく前に進むよイペの花
深爪に醤油のしみる春夕焼
落人の道ざわざわと竹の秋
余白無きフィールドノート西行忌
名産に魚醬なるかや島の春
誰かれも強き人なり牡丹の芽

小 和
朝田玲子
富沢壽勇
碓氷芳雄
佐々木成
片山旭星
中島冬子
森 壹風
中井昭雄
牧田満知子
仁田 浩
田中 勝
丹羽康夫
宮原亜砂美
谷口文子
西五辻芳子
大石高典
川上和昭
河村純子

氷室集

高揚の静けき村や鶏合
花冷や動物園に鎮魂碑
前髪の乱れや風の雪柳
羊の毛刈る少年が銃を持つ
指先のカナリア色ぞ松の花
いま土に還るときなり飛花落花
橋桁をすり抜け山へ油風
朧夜に吉兆の星カノーパス
象潟や茂吉遊びし春の浜
上賀茂の神馬目先に虻うなる

富沢壽勇
大石高典
川内一浩
牧田満知子
朝田玲子
福のり子
碓氷芳雄
仁田 浩
佐々木成
河村純子

初蝶の草の高さに飛び来たる
橘の北限の地や風光る
閨門に夏兆す風鳥の風
小刀に削る鉛筆昭和の日
無骨なる手に炊きあげし稚鮎かな
山荘のあるじ窓辺の花見酒
一度いま転んでみたき蓮華の田
病む夫と器につくる花筏
駄々こねる子の泣き止みぬ花吹雪
新入生隠し隠せぬ国訛り

福江ちえり
丹羽康夫
竹中一花
大野邦夫
谷口文子
小畷 和
山本京子
前田鈴子
佐藤 聡
佐藤慎一

2022年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

母の手に持たす学位記風光る
山荘の棚より父の雲雀笛
苔庭へ椿赤きが落ちにけり
雪解風荒ぶる丘の多喜二の碑
春耕や神の山とふ急斜面
啓蟄や小さき生き物なべて虫
鴨川に夜の帳来る春時雨
花冷の外堀を行く小舟かな
しやりしやりと水菜や明日を疑はず
茶畑の溜池へ登り行く蛙
タイルの目地白きが目立ち春時雨
待ちわびし日本蜜蜂二匹来る
被爆地の桜に願ふ咲く力
木々芽吹く「カレーの市民」肩越しに
春泥や轍跡なる荷の重み
事多き此岸なりけり彼岸西風
戦禍の子へ祈りとどけよ揚雲雀
馬の仔の足取りすぐに確かなる
春の雄滝穿ちて水の奔りけり

接木して後は天地に任せおく
花馬酔木香るゆふべや旅装解く
山腹を上へ上へと桜狩
膝上に手熨斗しつよ初音聴く

碓氷芳雄
朝田玲子
森 壹風
佐々木成
小畷 和
仁田 浩
片山旭星
富沢壽勇
谷口文子
丹羽康夫
宮原亜砂美
西五辻芳子
田中 勝
鴻坂佳子
川上和昭
長瀬朋孝
中井昭雄
城戸崎雅崇
牧田満知子
氷室集
仁田 浩
朝田玲子
碓氷芳雄
西五辻芳子

竹麦魚の鰾の歯応へ声に出て	大石高典
ものの芽に水の冷たさありにけり	福江ちえり
百年の重き藁屋根春の夢	山本京子
暁の沼蹴り白鳥帰り行く	佐々木成
星は去り春あけぼのの禽の声	津嘉山典
さざ波や近江の湖の春霞	片山旭星
菜種梅雨なほ断層のそばに住み	谷口文子
空も海も犬も映して石鱈玉	富沢壽勇
菜の花や富士火山帯すぐそこに	丹羽康夫
海上はるか淡路島霞けり	小寫 和
かく小さき水輪残しし初蛙	牧田満知子
満行の修二会壇供をぜんざいに	細見昌代
春風や鈴鳴らし行く修行僧	佐藤 聡
ガイド役の手の石叟鑑春の川	森川恵美子
たんぼぼの堤へ母の車椅子	大野邦夫
ふくらませ紙風船を妹に	中井昭雄

2022年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

冬林檎ぱりぱりと喰ひ妊馬なり	朝田玲子
野兔の足跡しかと社まで	佐々木成
旧正や教へ子はいま兵役に	小寫 和
深更や庭につがひの春の鹿	碓氷芳雄
寒満月凄みの失せて朝の空	鴻坂佳子
封印の方言は古語春近し	仁田 浩
日照雨来る八坂の塔や春の虹	中井昭雄
花衣誰に見するにあらねども	西五辻芳子
幕屋よりままごとの声うららけし	富沢壽勇
たひらなる風が麓へ山笑ふ	森 壹風
星雲のごとき蠟梅夕暮れて	大石高典
淡雪の中へ叡山線の消ゆ	片山旭星
うららかや宇宙飛行士募集中	石原ゆき子
春立つやいつもの位置に猫のをり	河村純子
太宰府におくれじと梅一花かな	川上和昭
海舟と鉄舟が碑や実割梅	丹羽康夫
薪割るや重なる山の春浅し	牧田満知子
北国のごとく窓打つ雪乱れ	立石律子

背中より土埃あび耕しぬ

宮原亜砂美

氷室集

荒東風や駆歩の速度を抑へかね
両隣へだてて高き雪の壁
旧正や佛跳牆のスープの香
部活動帰りの寒さコロケ屋
笹鳴へ上手くなれよと聴き入りぬ
退く気力今のうちなり落椿
木の実植うをさなの呉れし宝なり
四条烏丸西も東も山笑ふ
球根が雑誌の付録ヒヤシンス
猫車押し来る斑雪の畑
春浅しロバの背に負ふ塩袋
維管束見るにオランダキジカクシイネク
滝凍つや声よく通る脇の茶屋
風花舞ふ京都盆地の底にをり
春光に富士の輝き茶を喫す
苔まとふ古木に白き梅の花
東山つつむ霞や野の仏
流し雛重き祈りを背に負うて
梅咲くと気のやはらぎに水走る
ダム底にありし暮しや冴返る

朝田玲子
佐々木成
陶 慧慈
鳥居裕子
谷口文子
中井昭雄
西五辻芳子
小 和
仁田 浩
福江ちえり
牧田満知子
丹羽康夫
鴻坂佳子
河村純子
田中 勝
片山旭星
竹中一花
山本京子
宮原亜砂美
大野邦夫

2022年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

凍る夜や五右衛門風呂の板傾げ
囃子唄うろ覚えなり齋打つ
代る代る笛吹きつなぎ初神楽
鼻の目玉動くも首見えず
独り居は雪積む音の聞こえさう
賑はひに隣る母校ぞ宵えべす
高々と杜に声張る初鴉
パルチザンたりしと老女毛糸編む
酒田より三本届き寒造
舞初や袴の紐をきつく締め
御仏も龍も出でにし焚火の穂

碓氷芳雄
朝田玲子
小 和
中井昭雄
仁田 浩
中島冬子
佐々木成
鴻坂佳子
丹羽康夫
河村純子
森 壹風

火山島いよよ大きく冬の海
紙めくる音火花めく大試験
寒柝や聞き覚えある声近し
無為のごと竹輪麩の浮く関東煮
雲間よりオリオン冴ゆる渡月橋
座布団干す蕎麦屋ありけり春隣
楫や鳥の運んでくれし種子
雪道や最短距離を獣道

順番の太鼓待つ子や初神楽
年玉や子に還りゐる母にこそ
少年の眼鋭し騎馬始
渾淡くどんどは闇に戻りけり
荒土の凍る大地の深さかな
大海を跳ぬる形に鰯届く
留学生祖国を祈る聖夜ミサ
残雪の雨の形に尖りけり
焼畑のくの字の大根引っこ抜く
森の使者たるを頂く紅葉鍋
をけら火の縄の消し跡地下鉄へ
阿弥陀籤めく枯枝先へ先へ
薪割るる音の爆ぜたる焚火かな
寒鰯や賑はひ戻る輪島港
荒巻の鱗飛びちる夕べかな
生かされて阪神淡路震災忌
閉店の貼紙濡らす曇かな
晴天へ居坐るかまへ雪だるま
合言葉めく老いのこと寒見舞
寒禽は寂しからずや夕餉の香

西五辻芳子
大石高典
谷口文子
富沢壽勇
片山旭星
石原ゆき子
川上和昭
野木正博
氷室集
小寫 和
森 壹風
朝田玲子
仁田 浩
陶 慧慈
福江ちえり
佐々木成
小堀尚美
大石高典
浅利美鈴
宮原亜砂美
福のり子
佐藤 聡
中井昭雄
富沢壽勇
西五辻芳子
谷口文子
河村純子
山本京子
牧田満知子

2022年03月

氷華集

日捲りのもぎとりの瘡十二月
隣席の商談果てず冬の雨
初雪の融けぬ比叡へ月昇る
寒柝や揃はぬ声の曲り角
枯蓮や支へ合ひつつ向き向きに

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

仁田 浩
朝田玲子
片山旭星
小寫 和
中井昭雄

母仕立てし綿入の藍まだ匂ふ
穴十三の練炭熾す毬の嵩
風呂敷の角をしつかと寅彦忌
水潤るや栲原越ゆる脱藩路
玻璃戸背に生徒の並ぶ日向ぼこ
天浜線上り待つ間の焚火の香
木の実落つ人工林の防潮堤
乾布摩擦欠かさざる祖母冬の朝
手毬唄あより始めて臍たけて
飛び立てば冬ざれの街はや暮るる
陽と土の匂ふ厚司や父の膝
振売の賀茂の野菜や初時雨
朝日いま永観堂の散りもみぢ
吉右衛門逝き冬菊の香り立つ

網元の土間に大きな囲炉裏かな
初日待つ無言の男子高校生
切株の年輪数へ冬至かな
皮食うて舌滑らかに鮫鱈鍋
餅焼くや五徳とはさてなんだらう
暦果つ子の落書をまた吊るし
丹田にえいと気合の冬の朝
玉子酒飲み干してより迎へ酒
カステラのざらめざらつと冬に入る
大皿の湯気に冬至の餃子かな
水潤るるあたり往時の通学路
獅子舞は祖父なりされど恐しき
手枕の長々ひとり虫の闇
初雪や朝日の照らす東山
残業の頬のほてりや枯木星
列島の大きな溝や寅彦忌
えべつさんマスクしなはれ初戎
抱く子の小さき嚏や電車待つ
煮凝や鰯三匹煮付たり
命消えゆくを守りて冬の虹

佐々木成
中島冬子
河村純子
田中 勝
富沢壽勇
丹羽康夫
川上和昭
大石高典
西五辻芳子
牧田満知子
前田鈴子
石原ゆき子
野木正博
鴻坂佳子
氷室集
佐々木成
小畷 和
森 壹風
朝田玲子
仁田 浩
鳥居裕子
河村純子
浅利美鈴
谷口文子
陶 慧慈
碓氷芳雄
山本京子
福のり子
片山旭星
鴻坂佳子
富沢壽勇
西五辻芳子
佐藤慎一
野木正博
宮原亜砂美

2022年02月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

オリオンを追ふか加速の尾翼灯
地下足袋を風の煽るよ松手入
心拍のひとつ飛びたり冬隣
鹿寄せやベートーベンのホルンの音
一茶忌の猫や子供や丸くなる
渡し場の名残の杭や赤とんぼ
片時雨宇治橋渡り切らぬうち
ぶぶ漬や京の町家の隙間風
決断の時やも知れず冬の薔薇
幾度ぞ鮫鱈吊りし釘の錆
糸杉に絡みし霧の重さかな
踏張つてふんばつて子ら大根抜く
山腹を抜くる鉄路よ冬夕焼
星月夜姨捨山を通り過ぎ
薬草の薫香放ち山眠る
掘り起す土の匂ひや冬ぬくし
遠景の空の真青や時雨来る
窓側いつも妻の席なり初紅葉
石蹴りの石探しるる冬の川

秋ともしブリキの凹み戻る音
立冬や蓄へし髭剃り捨てて
松手入せし夜あをき香立ち上がり
北山に虹を架けたる時雨かな
ほどくよりまづ見通して枯葎
やつでの葉振り走る子よ小春空
初霜や千木のきはだつ伊勢の宮
地下足袋のかるき砂利音敷松葉
謎秘むる環状列石雁渡る
大豆引く根粒菌の土のこと
空と海分かつ水平線師走
銀杏や古代の星に触れてみる
牡蠣小屋の案内状に磯の香も
縁側の急須に湯気の小春空
十一月はたと寝所の模様替
うそ寒や音声案内鳴り通し
落葉掃き一日二度の京町家
月食の終はるまで待つとろろ汁
一生を働き盛り熊手買ふ

小島 和
朝田玲子
仁田 浩
西五辻芳子
河村純子
佐々木成
鴻坂佳子
森 壹風
富沢壽勇
中井昭雄
牧田満知子
中島冬子
碓氷芳雄
丹羽康夫
田中 勝
宮原亜砂美
片山旭星
河上和昭
谷口文子
氷室集

仁田 浩
森 壹風
朝田玲子
片山旭星
富沢壽勇
鳥居裕子
田辺美千代
鴻坂佳子
佐々木成
丹羽康夫
小 和
河村純子
田中 勝
碓氷芳雄
山本京子
福江ちえり
石原ゆき子
森川恵美子
中村順次

山茶花の透けたるとき白さかな

谷口文子

2022年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

真空管アンプ遺さう曼珠沙華
栗焼くや景福宮の大通り
菱の実買ふ紙袋より角出して
秋晴や金百円の山羊の餌
黄落や海へ急坂まるび落つ
柿ひとつ空の遠きを確認る
秋澄むや龍笛響く阿弥陀堂
先生に会ひたし木の実踏みてゆく
火恋し新聞とづる朝ぼらけ
長き夜のゆつくり揺るる地震かな
眠り落つ木地師の村の星月夜
具象より抽象となりとろろ汁
蒔絵師の極細の筆柘榴描く
手品師のごと鴉手に案山子立つ
爆心地に大樹と育ち銀杏散る
焼くとせむ籠に溢るる森の秋
色づくや池塘に浮かぶ未草
草堂の浅黄斑蝶にまた会うて

仁田 浩
富沢壽勇
中島冬子
鈴木春菜
朝田玲子
河村純子
丹羽康夫
小 和
碓氷芳雄
鴻坂佳子
佐々木成
大石高典
中井昭雄
森 壹風
田中 勝
牧田満知子
野木正博
石原ゆき子

氷室集

山側の席みな埋まり秋の富士
猪垣を張りし野菜のつつましく
朝霧や草踏む靴の重きこと
木通なら皮が美味しと陸奥は
乾杯の泡よグラスよ衣被
小包に故郷の印や柿の秋
朴の実や笙の音渡る羽黒山
まだ青き櫛の実櫛の木に揺れて
十月や干藁の列整然と
オリーブの実は箸休めタジン鍋
渋抜の柿の太きよ郷の味
人間国宝密葬なりし昼の月
銭湯のまたの値上がり秋時雨
柿食へば種とも言へぬ種のあり
居酒屋を出でて夜寒の別れかな

朝田玲子
仁田 浩
森 壹風
鳥居裕子
河村純子
碓氷芳雄
佐々木成
小 和
山本京子
富沢壽勇
田中 勝
佐藤慎一
大石高典
谷口文子
片山旭星

秋風に持て余す時預けおく
行く秋や鋏に残れる父の癖
九年母や電話したきに母は亡く
西へ行く絹の道なり柘榴の実
柿を挽ぐ実りの重さ手に受けて

石原ゆき子
前田鈴子
小堀恭子
牧田満知子
小堀尚美

2021年12月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

煙突に名乗る伏見湯天高し
梳かるるがまま換毛の秋の駒
青北風や新たに現るる島のあり
古稀前の終の献血九月尽
唐箕漕ぐ音軽ろやかに伊勢平野
青き穂を風の味方に荻なびく
狭庭辺を宇宙としたる子規忌かな
秋蟬や台座崩れし武家の墓
製塩の土器のかけらや草紅葉
ドラキュラめく喉の渴きよ紫蘇ジュース
七歳の手土産二十世紀梨
家計簿に日記一行つづれさせ
坂道の多き漁港や秋の風
ポー川の朝霧を捲きコンバイン
橡の実をさらし縄文めく暮し
一叢のさ揺ぐ白よ貴船菊
乱雑に資料積み上げ夜なべかな
刈跡に百舌の高鳴き響くとき
大原の里に秋風野辺に行く

仁田 浩
朝田玲子
古川邑秋
野木正博
西村みゑ子
河村純子
中井昭雄
佐々木成
木村静子
大石高典
小嶋 和
森すゞ子
富沢壽勇
鴻坂佳子
川上和昭
酒井富子
益子桂子
栗本一代
片山旭星

氷室集

傾げ見る洋書背文字に書肆の秋
長き夜や深く漂ふモルトの香
星月夜笛の音遠く遠くまで
犬をれば試してみたり猫じやらし
栗剥くや網代の夜なる波静か
龍淵に潜む夜明けのひかりかな
デジタル式地球儀回し夜半の月
秋郊の一草となりバスを待つ
笥の音土にひびけり曼珠沙華
空の国境越へてゆくなり鰯雲

仁田 浩
片山旭星
河村純子
富沢壽勇
朝田玲子
田中 勝
古川邑秋
山本京子
福江ちえり
森 壹風

小さき手に合掌数へ墓参	碓氷芳雄
秋の虹貨車を通して消えにけり	真下章子
島々に架くる橋殖ゆ翳雲	木村静子
初鴨の声にたかぶる暁の沼	佐々木成
太刀魚を捌けば長き卵かな	大石高典
初心者の刈田に鳥の多きとも	宮原亜砂美
名月は予報通りよ雲間より	石原ゆき子
営業の旗の失せたる崩れ築	酒井富子
十五夜の雲の流れの疾々と	益子桂子
餌を狙ひとんぼ動かぬず蠅地獄	南田美恵子

2021年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

傾けてボンベ転がす西日中	仁田 浩
蟻螂の浮く逆光の真昼どき	朝田玲子
秋立つや重さかはらぬ小銭入	古川邑秋
虫に逃げられし鳥逃げ初嵐	南田美恵子
松明は地元産なり門火焚く	大石高典
滑舌のよき商人や柘榴割る	富沢壽勇
蚕屋のほひ土蔵にありし終戦日	西村みゆ子
復元の動かぬ水車秋暑し	鴻坂佳子
鎌濡れてからむし刈りの朝まだき	栗本徳子
かまきりの力抜きたる雨上がり	真下章子
鳳仙花赤毛のアンのひとりごと	前田鈴子
最北の夏の日の出や礼文島	中井昭雄
坂道を一気に降りて夏の子に	河村純子
かつて何をしてゐしか原爆忌	川上和昭
灼けし岩くたく発破よダム工事	佐々木成
斎王の禊の浦や虫の声	山中ひでの
ゆうらりと七節ゆれて一步また	中島冬子
ジャスミンの香に夜の庭のただならず	酒井富子
噴水へ近づいて来るハイヒール	益子桂子
	氷室集
御陵の北半分の夕立かな	仁田 浩
将来のご近所に会ふ墓参かな	朝田玲子
子には子の食べ方のあり枝豆も	山本京子
立秋や地球の土に茶わん焼く	谷口文子
斑猫に見惚れて道を迷ひけり	佐々木成

夜の明くる前の静寂よ原爆忌
初秋や波打ち際のシュノーケル
八月や豪雨止まざる夜は長き
流灯や暗きに跳ぬる魚の群
炎天やトラムの軋む棕櫚並木
棚経や草履の小僧小走りに
吸盤をひとつ残して章魚が逃げ
夕されや庭師ひきあげ秋立ちぬ
円周率知つてをるかや向日葵よ
水桶にきうり三本午睡あと
むくむくとポパイ現はる雲の峰
待合室の一等の席小鳥くる
避難指示あげ六つの火の大文字
故郷はいまだ村なり吾亦紅
速達の封書の重し梅雨の闇

田中 勝
碓氷芳雄
石田祥子
富沢壽勇
鴻坂佳子
木村静子
大石高典
古川邑秋
河村純子
森 壹風
石原ゆき子
前田鈴子
栗本徳子
酒井富子
西五辻芳子

2021年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

たくましき顎もて摺む箱眼鏡
急雨来る地塘に群る糸蜻蛉
放たれし馬の躍動梅雨晴間
蟬声や授業にならぬ一限目
旧字体の角川文庫合歓の花
振り上げし釣竿の先雲の峰
清流にまかせる籠に瓜二つ
文豪の旧居への路時計草
「治山治水」の額ある生家梅雨出水
短夜や明るくなれば起くる日々
日盛や木の柵尖る関所址
炎昼や牛舎は暗き窓並べ
運河また風の道なり夏柳
ときどきは遠嶺を仰ぐ蓴採
捩花を残して庭の草を刈る
遠雷やしまひしままの将棋盤
膝濡らし孫太郎虫誘き寄す
雨の夜のひとむら半夏生の白
梅干すやおもちやの如露の俄雨

仁田 浩
野木正博
朝田玲子
中島冬子
古川邑秋
大石高典
中井昭雄
鈴木春菜
西村みゑ子
川上和昭
真下章子
小鷲 和
鴻坂佳子
佐々木成
富沢壽勇
木村静子
西五辻芳子
酒井富子
前田鈴子
氷室集

滝音に負けず話へ戻りけり	仁田 浩
広島空へ鳩舞ふ原爆忌	碓氷芳雄
夕焼やジュラ紀の空がここに現れ	森 壹風
夫のくれし白日傘こそけふの日に	朝田玲子
何用があるぞ夜更の蝸牛	小 瀧 和
振花や世代交代ままならぬ	谷口文子
馬刀つかむ腕の力のいや増しぬ	大石高典
業平の橋に留まる蛇蜻蛉	西五辻芳子
流れ来る潮の匂ひや二重虹	古川邑秋
汽水湖へ展くホームや閑古鳥	鴻坂佳子
葛饅頭ひたしひたひた水の音	富沢壽勇
行き帰り石に動かぬ川鶉みて	酒井富子
雷鳴を数ふる間なくすぐそこに	田中 勝
やんはりと歪む視界の花氷	益子桂子
涼しさや魚の棲みゐる鍾乳洞	南田美恵子
クマノミの切手や夏休みの子らへ	真下章子
松原に涼しく鳴くよ黒鶉	佐々木成
梅雨の月あればほんのり富士の影	丹羽康夫
初蟬は参道横の木立より	片山旭星
大鍋の蝦蛄剥く母の手際美し	山本京子

2021年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

枇杷の実の高きは鳥に残したり	栗本徳子
実梅落つ甘き香りの粉挽場	朝田玲子
田植機のとくに乱るる苗の列	仁田 浩
宇治川に雲のかかる日新茶買ふ	小 瀧 和
苗打ちの名手こそぞりて下手投げ	古川邑秋
商家出の母の手捌き鱧料理	鴻坂佳子
枝つかみゐて汲み上げし山清水	野木正博
牧場へ坂また坂の花空木	佐々木成
泥深く足跡残し田植終ふ	益子桂子
尺蠖が卓の長さを計りをり	中島冬子
麦藁帽柴漬漁の川漁師	川上和昭
庭石に脱ぎ捨つるごと蛇の衣	酒井富子
殻あるがゆゑの愛嬌かたつぶり	南田美恵子
梅雨晴間特等席は猫のもの	河村純子
無花果や無口な夫の地獄耳	西村みゑ子

毒草と媪囁くジギタリス
語り部の世代交代慰霊の日
何も置かぬありがたさなり夏座敷
遅刻せし生徒の配る李かな

空想に耽る午後なりかたつぶり
夏来る腕に覚えの伝馬船
濃あぢさみ修行の僧の行く小路
幽霊飴舌に転がす夏夕べ
積雲の高さ御苑の夏木立
溺れかけし不測や伊豆の土用波
雉子鳴けり手つかずにある畑は森
十葉や裏木戸細く開けてあり
薔薇香る暗き座敷のその奥に
足浸す湯気の傍ら登山靴
枇杷の実やすぐ仲良しに女の子
結といふ仕来り消えて田植かな
玉虫の死し千年の光りとも
夾竹桃と原爆ドーム雨やまず
梅雨滂沱本能のまま危機回避
古代湖や見渡す限り布袋草
伊勢と知多つなぐ夕虹明日は晴
郭公のめつきり減りし空うつろ
風鈴に風の音色を託しけり
古稀なりと前列に座す夏期講座

西五辻芳子
福地義雄
片山旭星
大石高典
氷室集
朝田玲子
仁田 浩
中井昭雄
谷口文子
小寫 和
碓氷芳雄
古川邑秋
真下章子
河村純子
酒井富子
鴻坂佳子
大野邦夫
森 壹風
田中 勝
宮原亜砂美
大石高典
山中ひでの
佐々木成
片山旭星
森川恵美子

2021年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

みどりの日つい雑草に依怙最肩
回路図は頁見開き梅雨に入る
光耀のスタンドグラス夏はじめ
カウベルの音して牧に夏兆す
ハンモックしばらく私達の空
得心のいかぬ論文初蚊出づ
吉野川より分水の代田かな
象潟や植田に浮ぶ九十九島
夏めくや髪結び上げ出勤す
敷石の縁取りなせり苔茂る

氷壺集
朝田玲子
仁田 浩
中井昭雄
川上和昭
鈴木春菜
大石高典
古川邑秋
佐々木成
三原真紀子
益子桂子

一塊の石がダビデに古都の初夏
万緑の上に廊あり東福寺
農小屋より足出してゐる昼寝かな
はつなつや猫の見つむる竿の先
学寮より遙か雲間の五月富士
赤城山けふはくつきり新茶汲む
吊橋の先一面の桐の花
万緑の櫟野寺巨いなる秘仏
ドラえもん欲しきと願ひ春逝かす

甘噛みを素知らぬ馬よ若葉風
城跡に戦国遠しソーダ水
薄端の似合ふ床の間花菖蒲
石楠花や肩をすくめて応へたる
ドローンとは雄蜂のこと我が頭上
オーボエの響きたゆたふ聖五月
トロッコの名残の線路山桜
三光鳥威嚇する猫よそ目がち
星の夜やバナナ静かに熟されて
川波の光静かな立夏かな
東京といふ故郷や吊忍
母のひぎの団扇の風に寝入りけり
ドラキュラのごと羽広げ川鶉啼く
漫画本に腕の重さよ昼寝覚
農休み待ち実家へと柏餅
水の地図の刻々変はる田植時
廃寺跡ひろびろと飛ぶ夏燕
短夜や明恵上人夢日記
御喋りが迷惑となり山女釣
背に負ひし甥は古稀とや桜の実

鴻坂佳子
小寫 和
木村静子
西村みゑ子
富沢壽勇
酒井富子
南田美恵子
栗本徳子
河村純子
氷室集
朝田玲子
碓氷芳雄
古川邑秋
仁田 浩
大石高典
富沢壽勇
佐々木成
河村純子
宮原亜砂美
田中 勝
谷口文子
山本京子
森 壹風
小寫 和
森 幸子
益子桂子
木村静子
片山旭星
南田美恵子
山中ひでの

2021年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

山辛夷寄りゆくほどに匂ひなく
利腕の指太やかに新茶摘む
母牛を離れぬ仔牛山笑ふ
永き日や窓の大きな食堂車
緑摘むこと実習の始めとす

仁田 浩
中島冬子
川上和昭
鈴木春菜
小寫 和

感嘆詞幾つも付けて春の山	河村純子
三等三角点ここに花吹雪	野木正博
四肢の揺れ定まりすくと仔馬立つ	朝田玲子
出漁のエンジン音や朝雲雀	佐々木成
花人と目が合ふ庭の筵かな	三原真紀子
校庭の残花に雨や新任地	益子桂子
霾やモンゴル文字は縦書に	大石高典
栖鳳の屋敷に寄つて鳥帰る	山本真也
若芝や禁じられたるうさぎ跳び	古川邑秋
鳶かと惑はすごとき紙鳶かな	富沢壽勇
鶏の長鳴きの午後木瓜の花	真下章子
独り来し氷室の桜けぶり見ゆ	西五辻芳子
花菜漬一夜を借りし寺の朝	中井昭雄
若狭湾敦賀湾よと桜鯛	前田鈴子
	氷室集
遠足の海に燥ぎて山の子ら	仁田 浩
蛇穴を出づ川幅の狭き土手	古川邑秋
かりかりと餌食む音よ春の暮	河村純子
うららかや磁器婚式と貝拾ひ	田中 勝
一と夜さの雨に芽吹けり小町塚	佐々木成
行く春や灯火消さぬ記念塔	小 篤 和
啓蟄や何か出さうな松の洞	西五辻芳子
樹海にて磁石誤作動春の雲	吉田達哉
救急箱使ふことなく春休	谷口文子
新緑の谷や尾灯の赤き列	碓氷芳雄
弁当の隙にと摘んで鶯菜	三原真紀子
迅雷や折しも月の朔日に	山本京子
霾やハルマッタンの砂の粒	大石高典
寛げば枝葉の音や春の森	野木正博
曇りきて色あはあはと蓮華草	朝田玲子
追ひ追はれ刻み足なり雉の雄	南田美恵子
長藤の揺るる先なり能舞台	丹羽康夫
川底の浅きに出づる泉かな	富沢壽勇
雨垂れの打てば揺るる葉蛙啼く	森 壹風
基地の中の夾竹桃や明易し	志多伯節子

2021年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出
氷壺集

きつね雨過ぎて桜の三分咲き
手の長き猿が餌欲る日永かな
公魚のぴくりぴくりと魚信あり
鶯が百座踏破を祝ひくれ
お水取の闇打つ雨や僧白衣
鶏頭の種蒔く窓に見ゆる庭
屋根替や奪衣婆に降る茅の屑
ターバンに似て非なるかなチューリップ
アンデスの朱鷺色の塩鱈焼く
菜の花やぐいぐいと空押し上げて
熟するを待つアボガドや日の永し
よく食べる猫と本日春休
よなぐもり退職届ポケットに
掛軸に巻癖のあり雛飾る
光り落つる雪解雫や廃校碑
薄紙の皺ふんはりと雛納
門前の梅かはたれのバイク音
この先は踏ねば行けぬ落椿
鳥寄せの体験初め山笑ふ

名水を汲むや伏見の花の下
斧音のこだまに明くる春の柚
涅槃図や牛の後ろに猫丸く
芳草や道草せむと馬の寄り
逆光の瀬戸の多島や暮れかぬる
啓蟄や増ゆる人出を避けて虫
病癒ゆる東寺の僧よ花月夜
辛夷咲くスカイツリーを果てに見て
この小間にみな寄つて来る春炬燵
患者みな番号に呼ぶ春深し
林道の水たまりだに蝌蚪の群
瀬戸内や音かりかりと潮干狩
喝采の声上ぐるごと白木蓮
葦牙や歩く速さの屋形船
北に地震南に地震や落椿
春分や緑色岩の板碑群
跳ぬる子の足元そこに土筆生ゆ
二度寝せる産卵終へし赤蛙
あたたかや黒目を入るるぬひぐるみ
合否待ち無重力めく受験生

仁田 浩
小 和
大石高典
野木正博
栗本徳子
古川邑秋
真下章子
富沢壽勇
西五辻芳子
朝田玲子
川上和昭
河村純子
山本真也
酒井富子
佐々木成
益子桂子
鴻坂佳子
中島冬子
南田美恵子
氷室集

仁田 浩
佐々木成
古川邑秋
朝田玲子
碓氷芳雄
大石高典
河村純子
小 和
小川妙子
酒井富子
野木正博
田中 勝
富沢壽勇
鴻坂佳子
谷口文子
森川恵美子
宮原亜砂美
丹羽康夫
真下章子
小堀恭子

2021年5月

氷華集

炙られて反り正されて干鯨
寒雷の一つ激しく独りの夜
書き入るる予定の未来三月来
地固めの音の響くや木の芽風
表裏使ひ切る紙二月尽
立春や仙石線の外は真白
三寒の坪庭に差す薄日かな
春潮の尾道水道山迫る
たうたうと坂東太郎雪濁り
踏むまいぞ尻つくまいぞ露のたう
虫喰ひの苗木余分に寒肥す
青き踏む雑草といふいのち踏み
冴返る記憶を覚ます夜の地震
江戸風に囲ふ上野の冬牡丹
亀鳴くや化学とにかく苦手なり
寒明くる大文字山人多し
一列の練行衆やマスクして
海風に遊ばれてをり崖すみれ
冴返るおくどさん置く曼殊院

後醍醐院の吉野や春は遠からじ
砂抜きの浅蜷くつろぐ塩加減
本流へ支流割込む春疾風
校庭の記念樹小さし名残雪
鈍行の窓や飛び来る波の花
山茶花や集合写真つつましく
古文書の土蔵や梅の花盛り
立春や屋根まだ白き石巻
富士山の横へ伸びたる初電車
杉玉の酒屋に春の川の風
家が鳴るまたびしと鳴る春一番
沢庵の旨み引締め寒戻る
陵の森に消へゆくうかれ猫
真ある鬼になりたや寒念仏
冬の鹿すつと現れすつと消え

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

朝田玲子
佐々木成
河村純子
富沢壽勇
鈴木春菜
小畠 和
栗本徳子
仁田 浩
酒井富子
中島冬子
大石高典
川上和昭
益子桂子
鴻坂佳子
古川邑秋
野木正博
栗本一代
木村静子
片山旭星

氷室集

河村純子
朝田玲子
真下章子
碓氷芳雄
佐々木成
仁田 浩
木村静子
小畠 和
大石高典
山本京子
谷口文子
宮原亜砂美
古川邑秋
富沢壽勇
西五辻芳子

東山白々と明け初音かな
海苔粗朶に影を落して着陸機
川潤るや毎日渡る大井川
下萌や順路の坂に子規の句碑
春寒し音なく吹くでなき風に

野木正博
中村順次
丹羽康夫
鴻坂佳子
田中 勝

2021年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

人気無き舞台は寒し人恋し
黒潮に乗り来たるらむ初明り
かはるがはる寒禽来鳴く芭蕉像
風音の隠岐より届く寒卵
バオバブの梢が春をつまむやう
子の声の少し変はりて鬼は外
たてがみの刻むリズムに雪が跳ね
数へ日や計画になき町へ行く
梅大きこの大福茶いかにせむ
行く先の吾を見据ゑて冬満月
羽子板の裏絵に世相ありにけり
同じ刻同じことして去年今年
待春や困ひし野菜とり出しぬ
砂防ダム丈を競りあふ氷柱かな
白葱を刻んで僕は強くなる
仮の世の伊勢や広野のかぎろひに
ゆつたりと使ふひと日や日脚伸ぶ
春待てど桜古木の伐られけり
寒梅や少年高くみくじ結ふ

霜柱十五センチの靴の跡
漬樽の重し下がりぬ二月はや
風花や言葉少なき友の茶毘
核兵器禁止条約初明り
数の子の薄皮老眼鏡かけて
竜の玉ラピスラズリの化身にや
ガムランに影絵の浮かぶ冬茜
試みる京の雑煮のかしら芋
天空に光撒くごと寒北斗
のの字まで十日と少し大根干す

氷壺集

河村純子
仁田 浩
佐々木成
栗本徳子
大石高典
三原真紀子
朝田玲子
鈴木春菜
小 和
富沢壽勇
古川邑秋
中島冬子
益子桂子
野木正博
山本真也
西村みゑ子
真下章子
荒木昭代
森すゞ子

氷室集

碓氷芳雄
宮原亜砂美
佐々木成
田中 勝
河村純子
朝田玲子
富沢壽勇
小 和
古川邑秋
仁田 浩

声あげて泣くこと知らで雪見草
水槽の魚寄り合ひ春を待つ
小寒や通勤のごと熊二頭
門松は榊なりしよ上総郷
忘るるも世過ぎのひとつ初日記
踏みしむる音のたのしき霜柱
枝の目印辿り歩くよ雪の山
雪だるま尾灯消したる闇のなか
改良の文字に買ひたる胼薬
白味噌の中のつこつと雑煮餅

斎藤よし子
益子桂子
丹羽康夫
鴻坂佳子
中野 梓
木村静子
野木正博
西五辻芳子
南田美恵子
谷口文子

2021年3月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

落鱧の細長き貌捌きけり
お斎なら出汁の沁みたる大根とも
山眠るカミオカンデはこの底に
参道や咳止め飴の今昔
冬木立大地に影の瘦せ細り
常のごと凶面描くなり漱石忌
過去となる地層の上の落葉踏む
茶の花や茶師貫きし人に供花
寒き指に毛刈りの馬のすべすべと
雄松の葉雌松より鋭し年用意
老神父の握手ぬくとしクリスマス
どれどれと婆腕まくり大海鼠
重詰の一角のみが減つて行く
冬うらら屋根に魔除の竜の這ふ
内に曲がる氷柱ずらりと北の軒
地中よりの水の旨さよ霜柱
冬眠や亀の居場所の衣装箱
杖が身の一部となりぬ冬の月
冬の虹生家あたりに今日も立つ

大石高典
栗本徳子
仁田 浩
富沢壽勇
古川邑秋
小 篤 和
河村純子
中島冬子
朝田玲子
西五辻芳子
佐々木成
前田鈴子
山本真也
木村静子
益子桂子
野木正博
南田美恵子
山中ひでの
真下章子

氷室集

日本史の頁の染みよ薩摩汁
山頂のポストや雪は払はれず
冬ぬくしお薬手帳忘れてたり
冬うらら人に流され伊勢詣
この歳の坊主頭や枇杷の花

碓氷芳雄
河村純子
仁田 浩
宮原亜砂美
古川邑秋

人車てふ鉄道のあり冬ぬくし
実千両竜馬泊りし浦の宿
能登半島波たたせては鰯起し
赤蕪の芯まで赤く博打めく
窓開けて換気十分漱石忌
トンネルをあまた抱きて山眠る
初雪やソーラー発電停止中
閉校の門扉の錆や冬に入る
罅の手の指紋認証不可となり
味のしむ卵なによりおでん鍋
カシミアのセーター一生ものと決め
牡蠣喰ふや二人暮しに殻の嵩
貴女蘭の種こぼさじと煤払
度忘れの多き二人の日向ぼこ
水涸るや鶴の噴水ビル仰ぎ

富沢壽勇
木村静子
野木正博
大石高典
小寫 和
真下章子
益子桂子
佐々木成
南田美恵子
田中 勝
石田祥子
前田鈴子
丹羽康夫
酒井富子
鴻坂佳子

2021年2月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

咲き初めしサフランの蕊真紅なり
朝露や杜の奥なる灯火二基
てつちりや隣の席も死の話
室花や眠気はらふに伸びをして
落葉踏む鳥を驚かさぬやうに
紅葉濃し蟻の戸渡り四つん這ひ
百態にくぬぎ降り散る揚抗比
煙吐くあとひと雨の煙茸
鯨死して途端に色の変はりけり
しぐるるや京は西入ル東入ル
ふいに鳴く杜の懸巢よ立ち竦む
産土の家に誰が住む冬鴉
山梔子の葉が妙に好き冬の蠅
あるじ無き庭に獅子柚子ぐらんぐらん
秋鱈を堤防に干し志摩の暮れ
かの人とわかる仕草や頬被り
脚一本すてて遁がるる冬の蠅
懐手龍馬のやうに生きたしと
楷の樹や光残して裸木に

小寫 和
栗本徳子
鈴木春菜
益子桂子
河村純子
野木正博
朝田玲子
仁田 浩
大石高典
古川邑秋
佐々木成
鴻坂佳子
西五辻芳子
富沢壽勇
西村みゑ子
森 幸子
中島冬子
川上和昭
栗本一代
氷室集

時雨ては北山杉の遠ざかる	小 鷲 和
渋柿の渋とけさうな陽の光	仁 田 浩
山を背に冬日をしばし余呉の湖	栗 本 徳 子
宿題の合間あひまの木の実独楽	佐 々 木 成
秋暮るるさしたる話なきままに	河 村 純 子
秋夕焼池塘に空の色のあり	野 木 正 博
出陣の緋色のごとき冬紅葉	益 子 桂 子
海鼠腸の伸び縮みしてしごかるる	朝 田 玲 子
一畦を囲ひしみの冬構	古 川 邑 秋
若たばこの荷台やジャズの町の昼	牧 田 満 知 子
ここの在りとて竜胆の埋もれず	宮 原 亜 砂 美
鱸の子勢ひ込んで釣れにけり	大 石 高 典
初時雨降りし証の石畳	片 山 旭 星
雲水の声重なる冬の朝	谷 口 文 子
銅像のたれとは知らず落葉降る	木 村 静 子
置炬燵子は寄りつかず鬼ごっこ	大 野 邦 夫
ガラスペン握れば小春日和かな	斎 藤 よ し 子
東京の水甕のダム浮寝鳥	中 村 順 次
九州場所の居反りや教へ子の力士	南 田 美 恵 子
我家まだ昭和の暮し衣被	長 浜 利 子

2021年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

秋日和輪ゴムの朽ちし包解く	仁 田 浩
エスプリは長寿の薬味十三夜	川 上 和 昭
穴まどひ古地図の中の大井川	大 石 高 典
わが馬と分かっ林檎や試合果つ	朝 田 玲 子
ため息のやうに湯気吐く焼占地	小 鷲 和
軸の端のこんと打ち鳴る秋の風	栗 本 徳 子
大粒がきちんとふたつ落花生	鈴 木 春 菜
村ぢゆうの柿採り尽し柿の村	古 川 邑 秋
関ヶ原見ゆる城址に秋思かな	富 沢 壽 勇
枯蓮や猫唾へ来る魚の骨	中 井 昭 雄
舞ふ人と月とひとつに音のあはひ	河 村 純 子
戦中の火点の残る芒山	佐 々 木 成
柳散る水府提灯ともす酒肆	鴻 坂 佳 子
白秋忌見舞かなはぬ母へ唄	西 五 辻 芳 子
十二曲り秋の錦の火打山	野 木 正 博

ロックフィルダム 嬬やかな谷紅葉
暮れ方の残照余韻秋惜しむ
椎の実干す母の手もとを日だまりに
薄紅葉此処にて三人殺されし

中島 冬子
片山 旭星
栗本 一代
山本 真也

氷室集

保津峡を抜け冬霧の攻め来たる
月の出を待つ間に雲の流れけり
藁塚の伏兵めきて散らばれり
琵琶湖疏水抜けていきなり天高し
先導は奥駟道の飛蝗なり
颱風を忘るる鳶か明石灘
後れ蚊の刺すに思はぬ疾さのあり
摩天崖の空より紅葉始まりぬ
秋色のへばりつきたる余呉湖かな
戦国の城下を今に稲架襖
秋深し小説にある後日譚
一村にいまだ案山子の居続ける
波音や秋菜莢熟るる蚕の径
赤い実へつぎつぎ違ふ小鳥来る
潮の音のとどく社や松手入
見はるかす霧の風伝おろしかな
響き渡る防災無線いわし雲
やや寒の一点集中轆轤の座
秋深し一村の絵のアダンの実
群白く豊漁のごといわし雲

仁田 浩
片山 旭星
木村 静子
河村 純子
野木 正博
朝田 玲子
富沢 壽勇
山口 容子
大石 高典
碓氷 芳雄
小島 和
古川 邑秋
佐々木 成
酒井 富子
鴻坂 佳子
西五辻芳子
真下 章子
宮原亜砂美
牧田満知子
田中 勝

2020年12月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

法師蟬三度は鳴かず賤ヶ岳
刺し違へたる蠶螂の鎌と鎌
秋暑し看護師の手の走書き
黄金の国と記され露の玉
片仮名の八雲の手紙すいつちよん
秋暑し残り少なき置き葉
相談にのる人が居て夜長かな
瓢箪をかき分け主の出できたる
秋暁や時計の音に風の音

河村 純子
吉田多々詩
中嶋 文子
古川 邑秋
大石 高典
南田美恵子
鈴木 春菜
仁田 浩
川上 和昭

隧道の手掘りの跡や白木槿
この先へ来るなとばかり秋の蜂
せかせかと下駄鳴らし来る盆の僧
子の試作三年にしてマスカット
蚯蚓鳴くと預りし亀脱走す
これまでの半量ほどを菜種蒔く
鬼灯の鉢ぶら下げて銀座線
虫すだく名胡桃城址崖に果つ
足すこしぬれてうれしや秋の草
枯蓮や風の音ある池の端
せつかちな間違ひ電話秋暑し

渋谷 啓子
中島 冬子
佐々木 成
中野 梓
西村みゑ子
羽鳥 正子
益子 桂子
宮澤 淑子
木村 静子
中井 昭雄
森 すゑ子

此の秋は体温計も楽屋内
二の腕に風の確かな今朝の秋
藪蘭の紫を摘む秋驟雨
運動会ゴールの先にある記憶
高原の秋の七草抱き帰る
枸杞の実や街道筋のはけてふ地
尻尾ほどぜんご鋭き真鱒かな
稲架組むや山越えてくる雲低し
敬老の日とて一日茶碗売る
秋高し迷ひ迷うて貴船口
遅く出て貴船の月はすぐ隠れ
こぼれ萩掃けど掃けども地に縋る
いまもなほ武田軍団露の墓
いざよひや錆びたる弦に「神田川」
狐雨降るや夕陽に秋の虹
和太鼓の桴の乱打や秋暑し
枸杞の実に誇り満ちたる回の村
夜なべする此の空間の心地よし
建具屋の鋸屑の香や秋気澄む
ニューヨークの月にも同じ兎ゐて

氷室集
河村 純子
仁田 浩
朝田 玲子
古川 邑秋
佐々木 成
羽鳥 正子
大石 高典
渋谷 啓子
谷口 文子
宮原亜砂美
鳥居 裕子
西五辻芳子
宮澤 淑子
碓氷 芳雄
片山 旭星
櫛渕かりな
富沢 壽勇
山本 京子
木村 静子
福 のり子

2020年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

出羽三山仰ぐ平野や稲の秋
熟れ頃や猿の見過ごす瓜の味

氷壺集

宮澤 淑子
中嶋 文子

日本語の副詞虚しき原爆忌
秋茄子の重荷を下ろすごとく穫る
風鈴を狂はせてゐる夜風かな
山越えの力を貰ふ岩清水
赤とんぼ竹の箒がお気に入り
神鳴も雲踏み外すとは涼し
人を待つホテルのバーの金魚鉢
定位置を探して歩く大文字
秋立つや押しピン残るメモボード
嶺の端へ月重たげに昇り来る
上出来の南瓜ひとつをおためとす
風さそふ子規の淡彩秋海棠
真夜中に鐘撞くことも夏行かな
蟬しぐれ消ゆ八月のあの時刻
廃校に残る土俵や花木槿
ふと風の音にまぎれて秋の蝶
見失ふまで振り返り秋の蝶

大石 高典
羽鳥 正子
酒井 富子
佐々木 成
友永基美子
西村みゑ子
河村 純子
鈴木 春菜
古川 邑秋
渋谷 啓子
吉田多々詩
鴻坂 佳子
南田美恵子
川上 和昭
木村 静子
川内 麻美
川内 一浩

氷壺集

六斎の闇打つ鉦の里に住み
大豆稲架はぜる音なくはぜにけり
レポートの採点つづく法師蟬
朝顔の同じ色して同じ向き
刀豆の太りて刃とはならず
蜜豆の光ざくざくざく揺らぐ
野ぶどうを摘む子泣きべそ日暮れ来る
鬼灯やおぎなひ合うてひとつの目
稜線の影まで朱し夏の月
流星群寝ころんで待つ秋隣
鳳仙花する寄る猫に種はじけ
夏安吾や動物園の檻の中
微地形を秋風に聴く朝散歩
弦に触るる弓の角度や星月夜
カルデラのここ真ん中の大暑かな
寂しさを募らせて露草の露
岩壁の霧の隙間の岩桔梗
新涼や社の杜の木々さやぐ
花木槿遺影とならぶ未完の絵
夏に入る花見小路に下駄の音

吉田多々詩
古川 邑秋
大石 高典
川内 麻美
木村 静子
富沢 壽勇
牧田満知子
山本 京子
碓氷 芳雄
森川恵美子
山田ミチ子
河村 純子
小畠 和
朝田 玲子
仁田 浩
川内 一浩
野木 正博
片山 旭星
小堀 恭子
三原真紀子

2020年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

わづかづつ湖は北へと鳥渡る
機嫌よき鳥海山よ五月晴
社会的距離とり大き茅の輪かな
ゆつくりと夏霧はれて港の灯
地図帳に少年の夏捜すごと
万緑へ深く入り来て魚板打つ
ことしまたななふし宿る木の葉かけ
川音を近くに住めり夏の月
ビル街の暮れてきはやか二重虹
小次郎の燕返しか捕虫網
梅雨の間や遺跡に四隅袖付炉
老鶯の小路や波郷歩みしか
胡瓜封ず蘇民将来子孫なり
子蜥蜴を宝のやうに見せにくる
白雪にさらせし越後上布着て
全集の紙の湿りや松落葉
小刻みに草の揺れをり糸蜻蛉
鳳仙花弾くる種に明日あり
池塘ぬけ燧ヶ岳へ青野かな

古川 邑秋
佐々木 成
大石 高典
宮澤 淑子
河村 純子
酒井 富子
栗本 一代
渋谷 啓子
中嶋 文子
吉田多々詩
羽鳥 正子
川内 一浩
栗本 徳子
鴻坂 佳子
西五辻芳子
川上 和昭
南田美恵子
友永基美子
中井 昭雄

氷室集

ラマ僧のくるぶし細き素足かな
守宮鳴くにガムランの音森の闇
新しき香水にして梅雨明けて
土担ぐ茗荷の子あり脱稿す
瀬田川は琵琶湖の出口梅雨明くる
み仏に夕風至る寺門かな
球磨焼酎その里に梅雨出水痕
六月の海一枚の青さかな
振花の振れて咲くを待みとす
水煙の高きにまばら梅雨の星
空缶を拾ふ作業や草いきれ
白蓮のなかの一輪紅蓮
氷室の使通ひし道か合飲の花
河童忌や小さき門に雨宿り
星合や一語に願ひあふれしめ

宮澤 淑子
河村 純子
小嶋 和
大石 高典
齋藤 耐
川内 一浩
片山 旭星
佐々木 成
川内 麻美
鴻坂 佳子
碓氷 芳雄
南田美恵子
西五辻芳子
古川 邑秋
山本 京子

被爆語るに長命たれと祈る夏
身の丈に進む尺蠖跳んでみよ
不整脈またおきてをり半夏生
解散の声にはじまる夏休み
富士山の伏流水の鰻はも

石田 祥子
渋谷 啓子
朝田 玲子
仁田 浩
富沢 壽勇

2020年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

蜘蛛飛んで初めの一糸掛けにけり
水底の影の俊足みづすまし
少年の大きな歩幅緑さす
蝙蝠の昼は埒となる祠
植田より水の漏れゆく休耕田
サイレンの遠く消えゆく茂かな
蛍火の一つを追うて森に入る
新じやがをスープに仕立て給料日
道開く地目原野よ合歓の花
雲低くよどみてありぬ栗の花
足元に卵の殻や燕生る
睡蓮や八雲遺愛の長煙管
ざりがにのバケツを囲む坊主刈り
夏半ばズボンの寝押しずれやすく
薫風や土手より拝む阿弥陀さま
如何にせむ一個のみなる初なすび
江戸切子冷酒はこれと決めてをり
梅雨空や買ひ足しておく肉野菜
餌を運ぶ蟻ころびつつまるびつつ

渋谷 啓子
中嶋 文子
佐々木 成
中井 昭雄
古川 邑秋
鈴木 春菜
山本 真也
大石 高典
羽鳥 正子
森 すゞ子
中島 冬子
宮澤 淑子
吉田多々詩
益子 桂子
南田美恵子
長浜 利子
川上 和昭
川内 麻美
川内 一浩

氷室集

梔子の香り重たし傘の下
夏星を追うて珈琲冷めきつて
六月の篝火重く尾を引けり
蚕の子の磯飛び渡る跣かな
遠隔の会議果てたる素足かな
コココーラの赤よく目立つ海開
泥んこの顔見合はせて田植の子
舗装路に泥の足跡田植どき
短夜や砂吐く貝のひつそりと

朝田 玲子
福田 将矢
渋谷 啓子
佐々木 成
富沢 壽勇
碓氷 芳雄
中野 悦子
大石 高典
小畠 和

万緑や禰宜の袴は水の色
比叡より貰ひしものに田植水
ドーナツの穴の向うに夏休み
向日葵や寝る間を惜しむごとく伸び
岩走る水の冷たさ山女釣
階を見上ぐる一步より登山
かすかなる苔の起伏や杉木立
若楓陵墓の森を大きくす
ゆるやかな坂道に行く薄暑かな
いにしへの環濠奈良の牛蛙
さりげなく蜂をよびこむ破れ傘

木村 静子
片山 旭星
河村 純子
中嶋 文子
小川 妙子
川内 麻美
宮澤 淑子
古川 邑秋
川内 一浩
中村 順次
城戸崎雅崇

2020年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

植田なる里げこげこと眠られず
時計草きりきり巻いて垣低し
郵便物畦に届きぬ田植時
地の甘さ陽の苦さとも松葉独活
デワクジラ出土の丘や苜蓿
薫風や山路ここより透きとほる
一輛を離し支線へ青田風
春キャベツ半玉分の蟠り
穂の小さき原種の小麦薬草園
大庇より紺碧へ黒揚羽
風薫る一年生になりし声
禅寺や房の短き藤の花
通し土間出づる眩しさ檜若葉
居座りし棚田の巨石青田風
飛び立てる雀の嘴に桜の実
母の日やエプロンはもう欲しくない
奈良町の身代はり申や柿若葉
籐椅子の軋みてなじむ背中かな
ゆるやかに鯉の影消ゆ蓮浮葉

中嶋 文子
木村 静子
中島 冬子
栗本 徳子
佐々木 成
河村 純子
仁田 浩
山本 真也
宮澤 淑子
川内 一浩
川内 麻美
大石 高典
羽鳥 正子
渋谷 啓子
南田美恵子
長浜 利子
古川 邑秋
益子 桂子
森 すゞ子

氷室集

緋目高や玄関に置く杖一つ
ハンガーに眺めて夏のワンピース
紅ばらを剪り薔薇の木を鎮めけり

川内 麻美
中嶋 文子
古川 邑秋

気配あり蛇横たはる谷の道
十三仏巻き納むるやえごの花
薔薇咲くや留鳥のごと氷川丸
春惜しむ岸や声なき太田川
草蔭を出たり消えたり夏の鴨
自転車の出前行き交ふ春の雨
との曇るきのふやけふや時鳥
分け入りて見失ひけり山桜
播州の御坊のたより笛来
忙しげに飛び大梁へ夏燕
父の手を離さず夏の坂の町
風薫る宇治の中洲に戦の碑
鎌倉や古樹の重たき青嵐
田蛙や疫病封じの藁人形
げんげ田のあるを知らずに時過ぎぬ
魚屋に行列ができ初鯉
古墳近く住み生涯の田を植うる

野木 正博
朝田 玲子
宮澤 淑子
碓氷 芳雄
富沢 壽勇
石原ゆき子
羽鳥 正子
斎藤よし子
鴻坂 佳子
南田美恵子
川内 一浩
片山 旭星
林 剛
佐々木 成
河村 純子
大石 高典
木村 静子

2020年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

蕨採る猿との距離を測りつつ
玄米の発芽の早さ花の昼
鮮やかやチマのごとくに山躑躅
草の芽や老いて手にする学生証
焼原や埒が黒き跡となり
いたどりの笛を上手にまたぎの子
休業の張り紙の店燕来る
白壁のこんなに白く春きたる
鳥雲に關八州の空ひとつ
春陰や海に戻りし干拓地
重文の屋根の藁引く春の鳥
復活祭くつくと啼ける白き鳥
少年野球ひとりは少女花吹雪
この仔猫「吾輩は」とは言はせぬぞ

中島 冬子
鈴木 春菜
栗本 徳子
古川 邑秋
中嶋 文子
佐々木 成
河村 純子
仁田 浩
川内 一浩
宮澤 淑子
羽鳥 正子
川内 麻美
渋谷 啓子
中井 昭雄

氷室集

鳥海山の風吹き渡る牧開
遠足の列を離れて象の前

佐々木 成
川内 麻美

黒玉にみるみる手足出でて蝌蚪
今日からは燕加はる峡の空
水耕の根のにぎやかにヒヤシンス
一群の墓石隠せる臙かな
花屑の光の嵩よ日照雨来る
松雀鳥榭の樹冠を這ひまはる
ささめきは石を転がす春の水
隠れ入る鯉や疏水の花筏
父が酒場よりもらひ来し仔猫かな
帯なして稚魚の大群春闌くる
大口の馬の欠伸や海のどか
風光る鰻絵の竜の動くがに
父の皺の来し方探し花見酒

福田 将矢
長浜 利子
仁田 浩
吉田多々詩
宮澤 淑子
堀口 忠男
林 剛
野木 正博
川内 一浩
大石 高典
南田美恵子
木村 静子
碓氷 芳雄

2020年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

春宵やベテルギウスは生き残る
一碗の茶を点て坐せば西行忌
文政の算学掲げ梅の寺
臙夜や君に抱かれてぬひぐるみ
春暁や靱蔓の壺の奥
夕桜下枝を水に遊ばせて
肉球の破れし犬や獵期果つ
僧列の袍衣うつくし涅槃西風
やや紅の勝ちに源平桃の花
畑焼くや白き頂きはだちぬ
引つ越しの合間に出され土筆和
おつとりとして敏捷な春の蠅
半島の巨岩奇岩や鳥帰る
啓蟄や土を均して文字遊び
翅畳み蝶は枯葉となりてをり
菜の花や川幅広き橋渡る
陵の北面を守る椿かな
石室に春日さし込み鳥のこゑ
早春のペットボトルの水を飲む

仁田 浩
川村 純子
木村 静子
川内 一浩
川内 麻美
中島 冬子
大石 高典
栗本 徳子
中嶋 文子
益子 桂子
鈴木 春菜
長浜 利子
佐々木 成
山中ひでの
羽鳥 正子
渋谷 啓子
古川 邑秋
栗本 一代
山本 真也

氷室集

廃村の蝌蚪の犇めく水たまり

福田 将矢

馬の仔の尾の短くて忙しなき
地球儀を消毒したき春の星
木蓮のみな空を向きあいそなし
母を真似さくら隠しを掌に
沈丁花ふあつと香る待ち惚け
川波寄る貝塚遺跡初蝶来
北嶺に彼岸の夕陽掛かりける
王羲之の書にも春風見つけたり
垂直の梯子は地下へ独活の室
道問へば藁の方へ行かれよと
轉を吾に訳する器械欲し
猛る風バター茶を煎るゲルの春
鈴の緒に除菌の湿り春寒し
生菓の瓶並ぶ棚あたたかし
拍子木の響き淋しき浪花場所
古井戸の井桁囲ひや諸葛菜
茅葺屋根の天辺にあり名草の芽
春昼のないしよ話は堰を切り
忘るまじ被爆桜の咲き誇る

朝田 玲子
河村 純子
仁田 浩
川内 一浩
川内 麻美
佐々木 成
齋藤 耐
小堀 恭子
益子 桂子
林 剛
長浜 利子
牧田満知子
宮澤 淑子
木村 静子
片山 旭星
中村 順次
渋谷 啓子
中嶋 文子
田中 勝

2020年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出 5月号

氷壺集

発酵の樽まろまろと春動く
眼ちからのありて強者や寒稽古
梅咲きて雀の声を明るうす
梅二月人それぞれの最寄り駅
修二会僧の息うかがひぬ女人講
夕暮や雪野に点る牧舎の灯
封をしてのち誤りと言ふ余寒
梅一輪お目見えの妓の簪に
たつぷりと水ゆつたりと梅の花
覆面の寡黙に懸想文を売る
ビル影の角円くして朧月
宿木へ鳥繰る閏二月尽
当麻寺の青き双塔おぼろ月
燻りへ焼べ足ながら耕せり
白魚の数が動いてみたりけり
水藪ひそむ深山の水の温みけり

仁田 浩
中嶋 文子
川内 麻美
川内 一浩
栗本 一代
佐々木 成
大石 高典
河村 純子
鈴木 春菜
栗本 徳子
中島 冬子
宮澤 淑子
鴻坂 佳子
羽鳥 正子
古川 邑秋
長浜 利子

花鳥はいづこの深空より来しか
計らひの思はぬ方へ山笑ふ
慰霊碑の前後左右に猫の恋

西五辻芳子
中井 昭雄
山本 真也

待合へ招き入れたし雪だるま
母の手をしかと握る児梅若忌
蛇出でてホモサピエンス囲みある
自動ドアより鬼来たる節分会
固まりし蜂蜜ゆるむ春隣
多喜二忌や波猛り立つ北の海
筆塚に筆一束や梅紅し
敷藁の順路に梅の花二つ
促音まだ書けぬ手紙よ春の風
しぶき凍り同じ向きなす谷の岩
似我似我と羽音聞き止め蝶嬴追
菜の花や故郷の土手は滑り台
冴返る比叡に続く雲母坂
観潮の顔打つ髪や風の息
絶筆は平和の二文字春ともし
壬生寺のカンデンデンと厄払
師の師なるお墓に参り余寒なほ
長靴のしだいに重し凍ゆるむ
御勝手にとんかち振るひ牡蠣を剥く
廃校の庭や往時の寒椿

氷室集
中嶋 文子
河村 純子
福田 将矢
仁田 浩
大石 高典
佐々木 成
木村 静子
鴻坂 佳子
宮澤 淑子
野木 正博
西五辻芳子
田中 勝
片山 旭星
朝田 玲子
吉田多々詩
南田美恵子
川内 麻美
益子 桂子
宮原亜砂美
碓氷 芳雄

2020年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

背を向けて毛布被るはボスゴリラ
めて鯛の双び飾りや初芝居
吐く息にわらぎの構へ初稽古
正月や喜多さんにとふ山の道
風筋に逆らひて行く寒念仏
とつぷりと暮れ寒柝の次の音
勝負師の顔つきとなり歌留多取
酒粕や杜氏の友の寒見舞
大跨ぎに京の都を冬の虹
寒灯の深きに人が錫工房

氷壺集
川内 麻美
栗本 徳子
中嶋 文子
鈴木 春菜
木村 静子
川内 一浩
南田美恵子
中島 冬子
河村 純子
鴻坂 佳子

繭玉や天井高き里座敷
淑気満つ大神神社のお手洗
御火焚や競ふ炎と小山伏
初夢に大論文を書き上ぐる
八雲立つ出雲の村に寒の雨
年越ゆる音なき音に耳澄まし
お降の傘干されあり社務所脇
関所跡の武具に埃や日脚伸ぶ
一途とふ思ひは秘して鷹放つ

佐々木 成
山本 真也
古川 邑秋
大石 高典
三原真紀子
中野 梓
西村みゑ子
真下 章子
羽鳥 正子

氷室集

棒鱈を好物と言ひ嫁となり
春闘や靴のかかとの減り具合
武蔵野に霜の広がる開墾地
野兎の足跡続き山眠る
鱒待つ男の影や番屋の灯
重ね着に故郷の匂ひありにけり
本棚の上くれなゐの冬薔薇
大寒や妻踏みたがる水溜り
薬剤名の百頁ほど店卸
煮凝や取皿の絵のみな違ふ
声援を背負うて走る冬の風
しんと来るもの耳にあり枯木山
突き一発動から静へ寒稽古
白金の冬の月あり銀閣寺
馬運搬車ぬくぬくと揺れオリオン座
大寒の時針まちまち時計店
まだかまだか年終るぞと誕生待つ
消ゆと見せ水に還りし春の雪
己が影に手をふる幼ナ春隣
立の字の如き花芯や冬椿

河村 純子
大石 高典
林 剛
佐藤 聡
佐々木 成
福田 将矢
川内 麻美
川内 一浩
中嶋 文子
羽鳥 正子
田中 勝
堀口 忠男
吉田多々詩
野木 正博
朝田 玲子
渋谷 啓子
西五辻芳子
小嶋 和
宮澤 淑子
昌山瑠美子

2020年3月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

聖夜ミサ少年の目に灯の揺れて
朝まだき足袋の小鉤の冷たさよ
内海や島のかたちに冬の雲

栗本 徳子
河村 純子
中嶋 文子

藤十郎とある簪や事始
コッヘルの雑炊旨し峰に入る
どんど焼煤にまみるる村百戸
白山の冠雪を背に笠地蔵
言霊に色あるならば竜の色
ブルースよりワルツにかはり年の暮
獣肉とジビエの違ひ山鯨
ジンライム色の月なり十二月
轆轤挽きの腕手に馴染む干菜汁
赤福屋の釜に湯気立つ小春かな
行きたきと地図を眺めて着ぶくれて
被爆樹の実生の若木黄落す
腰痛はともかくとして年を越す
卓上に千両一枚ある朝餉
隣人の芝に気づきし枇杷の花
亡き父の座は空けておく節料理

中島 冬子
中井 昭雄
佐々木 成
三原真紀子
川内 一浩
仁田 浩
大石 高典
西村みゑ子
羽鳥 正子
森 すゞ子
川内 麻美
宮澤 淑子
山本 真也
川上 和昭
南田美恵子
古川 邑秋

氷室集

間の悪き鼓の音よそぞろ寒
横文字のただただ走る夜なべかな
星屑の星を纏ひて冬並木
冬の芽や生きて生き抜く被爆樹も
白萩や月はゆつくり遠ざかる
炭俵編むや山家の土間昏し
キネシオテープ馬に貼りやる小春かな
雨音の霰に変はり朝まだき
冬ざれて象の睫毛の長きこと
煤逃の夫より掃除機のルンバ
暮早し馬籠に灯る常夜燈
風花や移ろふものにある光
山茶花や丈山の門くぐるとき
弾きなれし琵琶の重たき春星忌
風が掃く落葉の出町柳かな
玩具こそ技術の粋やクリスマス
おそろひのひとつとなりぬマフラーよ
ゆつたりと広島湾の鰯群れ
海峡の潮動きそむ冬夕焼
新駅やおでん屋台の名残なく

河村 純子
大石 高典
小嶋 和
田中 勝
堀口 忠男
佐々木 成
朝田 玲子
中嶋 文子
福田 将矢
川内 麻美
長浜 利子
川内 一浩
石神 主水
片山 旭星
鴻坂 佳子
仁田 浩
谷口 文子
野木 正博
宮澤 淑子
三原真紀子

2020年2月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

鉦の音少しずれたり十夜講
大の字の火床ほつほつ草紅葉
初霜に観念したる庭の草
風垣を大きく組んで村黙す
一茶忌と知つてか庭の雀来て
冬もみち蔵飛ぶ絵巻みてをりぬ
藪沿ひに行きし狐が藪に消ゆ
峠へと続く落葉の音を踏む
瓢の実や忙しくなき振りをして
落葉踏み昨日の私消してゆく
矢狭間より光の矢来る小六月
輪の中に入らぬ子あり返り花
秋時雨やつつけ仕事ふたつあり
櫛紅葉お頭と云ふ大天狗
蒲団干すずしりと重き歳の数
長明も見しか日野路に狸出づ
石段に宿題する子小六月
冬蜂のとどまる石の温みかな
お手玉の掌に憶えあり一葉忌

氷壺集

栗本 徳子
鈴木 春菜
中島 冬子
佐々木 成
三原真紀子
宮澤 淑子
羽鳥 正子
川内 一浩
大石 高典
河村 純子
木村 静子
南田美恵子
仁田 浩
川上 和昭
吉田多々詩
中井 昭雄
渋谷 啓子
酒井 富子
鴻坂 佳子

氷室集

口長き矢柄を食ひて冬に入る
組み上げて音なく昇り鷹柱
馬の背の右や左や秋深し
星月夜首里城惜しむサンダンカ
ぶり大根母の威厳の保たれし
波郷忌の落葉掃く日と定めけり
鴟猛る戌辰の役の墓荒れて
枯芝を背中一杯付け歩く
きのこ干す同じ筵の柿の皮
付添ひやおでん腑に染む三泊目
綿虫の寄らず離れず暮れはじむ
山茶花やしかけ雨戸の武家屋敷
国境の無き鐘の音や冬の雁
短日や長き休符のやうに闇
何万の紅葉のひとつ拾ひけり

大石 高典
堀口 忠男
野木 正博
宮原亜砂美
谷口 文子
川内 麻美
佐々木 成
川内 一浩
仁田 浩
朝田 玲子
真下 章子
木村 静子
河村 純子
昌山瑠美子
伊藤 恵

時雨るるや比叡に虹の消えるまで
冬めくや早寝にありぬ日の温み
冬着干す小まめに向きを変へながら
時雨るるや庁舎すつぼり虹の中
三河なる回船問屋縞布団

片山 旭星
酒井 富子
羽鳥 正子
渋谷 啓子
宮澤 淑子

2020年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

山を背に舟屋のくらし秋うらら
白一花酔ひそこねしか酔芙蓉
二人分もらつて帰る栗おこは
風の来て音立ちはじめ鳥威
神域のほとりつましく秋耕す
鳥威夕闇ひたと迫り来る
靴底の草の実落とし尾瀬に入る
秋薔薇の新芽の棘の紅きこと
天高しネクタイ決めて日曜日
尾根つなぐ出羽三山や雁の棹
木道の右を譲りて野路の秋
原稿を置き去りにして秋祭
秋深し失礼ながら名を質す
尊徳の本湿らせて秋時雨
ゆつくりと来てゆつたりと秋の蝶
焼藪の熱きを胸に少女駆け
身に入むや鸚哥の墓に石一つ
行く秋の河口に舳ふ舟灯り
先に逝きし弟君と花野へと

栗本 一代
中島 冬子
鈴木 春菜
益子 桂子
木村 静子
羽鳥 正子
長浜 利子
川内 麻美
中嶋 文子
佐々木 成
川内 一浩
大石 高典
仁田 浩
古川 邑秋
渋谷 啓子
本多 智恵
森 すゞ子
鴻坂 佳子
西五辻芳子

氷室集

蠨螂の雄かも知れぬ放ちやる
劇場を出づれば月の街ロシア
がらんだうの牛舎を抜くる葛嵐
長き夜や藍甕の泡ふつつと
ひよんの実の鈴なり風の吹くばかり
口琴の音色過ぎ行く秋の路地
しづもれる小雨となりぬ冬隣
赤き実の子の記念樹や小鳥来る

川内 一浩
河村 純子
佐々木 成
朝田 玲子
木村 静子
川竹 美樹
羽鳥 正子
酒井 富子

赤い羽根夫の取り出す小銭入
作り置くもの食卓に颱風裡
諍ひの後の洗濯天高し
円を描き線をつなぎて林檎剥く
虫の音の細くひそめる雨の夜半
影ひきて白き猫ゆく秋の道
まもなくと車窓の秋の海を待つ
朝採りの丹波松茸香るのみ
花言葉は唯我独尊秋の雨
秋雨や傘持つ母が改札に
秋深し親に不幸と侍真僧
爽やかや子に初めてのホームラン

川内 麻美
中嶋 文子
谷口 文子
昌山瑠美子
片山 旭星
鴻坂 佳子
小島 和
石原ゆき子
石神 主水
佐藤 聡
細見 昌代
中野 梓

2019年12月

氷華集

* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

墨東や昭和の残る夜なべの灯
金風や爪の歪みし仙人図
朝空に印章のごと月淡き
秋澄めり海はひかりを屈折す
秋灯やしづかに開く智恵子抄
身に沁むや匂ひ酸っぱき加加阿の実
恐ひもの何時も不意なり秋の蛇
順調な加齢の診立て秋の雲
十六夜の月が覗くや校正す
売尽す青果の棚の糸瓜二個
秋澄むや時の鐘打つ蔵の町
手を浸けて四十五秒秋の水
店の名の薄れてきたり渋団扇
水音や植治の庭のこぼれ萩
故郷は刈田の風のかをりのみ
山寺の時鐘間延びず秋の暮
稲架干しは自家用のみと仕立てけり
秋風や猫に小さな喉仏
赤城山の裾ひろらかや林檎熟れ

伊藤 武敏
中嶋 文子
渋谷 啓子
西村みゑ子
佐々木 成
大石 高典
酒井 富子
四宮 陽一
中島 冬子
山口 智子
川内 一浩
羽鳥 正子
南田美恵子
城島 千鶴
吉田多々詩
遠藤 長代
高橋キセ子
長浜 利子
宮澤 淑子

氷室集

白きものばかりを干して秋の暮
鼻揺らしワルツを刻む象や秋
四屯の象のダンスや秋の蝶
市長なる襷に背広着て案山子
秋色を纏ひて船の客となる
まん丸がお空にゐるよ月今宵
猿を見る秋日に影の猿めけり
子どもには子どもの事情夏終る
眼鏡橋ぬけて秋風吹き来たる
ごきぶりやタイムマシンのつくり方
新涼や飛び石濡れし苔の庭
佐和山や秋の音して風渡る
対岸の闇に浮きたる夜業かな
十五夜の雲ゆつくりと遠ざかる
秋澄むや座り心地のよきベンチ
単調な朝の雨音震災忌
足あそびにリフトの揺れや鳥頭
秋風が新たな私呼びにくる
三ツ星というてた秋刀魚をいただきぬ
翹雲伸び行く先に子の住居

鈴木 春菜
川内 麻美
川内 一浩
中嶋 文子
河村 純子
山口 容子
小嶋 和
谷口 文子
木村 静子
山本 真也
片山 旭山
石原ゆき子
宮澤 淑子
城島 千鶴
中井 昭雄
斉藤 耐
高橋キセ子
昌山瑠美子
中野 梓
佐々木 成

2019年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

炎天やボール散らばるネット際
秋立つや川辺に探る風の音
立秋や朝の光の跳ね返る
秋の昼童話からくり動き出す
玩具ひとつ部屋に転がる夏の果
まだ暗きうちより蟬のせはしげに
奥秩父の白雨武州へ信州へ
ダムとなる木地師の村や月のぼる
夕暮の沼に牧童牛冷す
萬金丹臨時休業炎暑なり
叩かずに渡る石橋秋澄めり
古希とても途中経過や秋の雲
疎開先の本家の暗さ一位の実
鉄塔も我が家も跨ぎ虹立てり

中嶋 文子
長瀬 朋孝
城島 千鶴
木村 静子
渋谷 啓子
大野千鶴子
伊藤 武敏
吉田多々詩
佐々木 成
西村みゑ子
羽鳥 正子
四宮 陽一
鴻坂 佳子
酒井 富子

滴りの糸の音の乱れざる
空蟬を服に付けてくる得意顔
朝顔の日に日に小さき花となり
山荘の緑蔭に聴くビバルディ
盆の夜や寝返りを打つ子を見やり

西五辻芳子
高橋キセ子
南田美恵子
植田 清子
川内 一浩

氷室集

沖へ向け千の鳥賊干す蟹の村
虫干の蔵ひつそりと闇の中
広重の峠を越えてとろろ汁
真実は正多角体天高し
メロン切る孫の皿へはやや太め
海水着干すペランダの子沢山
海亀の産まれて砂の道遠し
鴉より先に食はねば庭の梨
草鞋履きし柩の兄や夏座敷
重版の知らせもらひぬ河童忌に
一つ窓に一家寄りあふ遠花火
谷地の田の日和めでたき稲の花
悩みごと打ち明け墓の草を引く
きつねのかみそり祠にも御柱
夏空や目に風運ぶポプラの葉
暮れかかる橋へ寄り来る鬼やんま
山寺の仁王踏ん張る暑さかな
水槽の鰓の動きも酷暑かな
おみやげは撃たるるための水鉄砲
ピラミッド型に切り分け西瓜喰ぶ

佐々木 成
河村 純子
鈴木 春菜
山本 真也
田崎セイ子
西五辻芳子
中嶋 文子
宮原亜砂美
酒井 富子
大石 高典
鴻坂 佳子
中村 順次
山中ひでの
宮澤 淑子
鈴木あるの
城島 千鶴
森 すゞ子
栗本 一代
吉田多々詩
遠藤 長代

2019年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

子午線や明石の蛸のうすづくり
誤字脱字多きレポートはたた神
本水に客席濡るる夏芝居
鉦のみの二階囃子や夕まぐれ
抽選の玉一等の扇風機
弟が兄を必死に泳ぎ越す
雨雲の動くけはひのなき小暑

伊藤 武敏
大石 高典
四宮 陽一
中島 冬子
中嶋 文子
佐々木 成
益子 桂子

雉鳩の来し梅雨晴の水たまり
焚口の横が定位置洪団扇
梅雨寒や眠りし母に昼灯す
息そつと吹きかけ立たすてんとむし
日月の石灯籠に苔の花
まだ泣いて居たり夏帽深くして
鳥啼いて神を宿せる夏木かな
桃の実の香そのまま箱に閉ず
川舟の打ち上げられて月見草
裾濡るるも厭はずただに水を打つ
七月やきりと森の引き締まり
人を許せと神は言へども原爆忌

酒井 富子
大野千鶴子
渋谷 啓子
羽鳥 正子
城島 千鶴
川内 一浩
森 すゞ子
福地 義雄
木村 静子
鈴木あるの
古川 邑秋
友永基美子

氷室集

傘鉾や稚児の袖の緒揺れつゆく
炎熱の跡をとどめし忘れ物
ころころと胡瓜まはして胡瓜切る
たくさんのこと忘れても夏だから
秋田露刈るや大空傾けて
顔よりも大きな百合の匂ひけり
流木と遊ぶ汀や夏の果
薪を割る無言の汗や登り窯
阿弗利加の毒とはこれぞ甜瓜
青蜥蜴遁走までの刹那かな
初夏の古物市に迷ひ込む
やりとりの速き筆談かき氷
手入れなき土蔵に育ち燕の子
原爆忌祖父の秘密を吾子が知る
黒子かと思ひしが壁蝨掌に
旧友と話の尽きぬ鱧の膳
木苺の摘んで摘んでと赤くなり
有東木の山葵門外不出にて
時々足下を打つ団扇かな
道ふさぐ蛇の全長動かざり

栗本 徳子
河村 純子
鈴木 春菜
小嶋 和
佐々木 成
川内 麻美
川内 一浩
伊藤 恵
大石 高典
山本 京子
山本 真也
宮澤 淑子
三原真紀子
田中 勝
西五辻芳子
鈴木あるの
酒井 富子
宮原亜砂美
仁田 浩
高橋キセ子

2019年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

梅雨晴や官庁街の土匂ふ

伊藤 武敏

きしきしと茄子の皮剥くらいてう忌
北窓に夏日うつろひ醬油蔵
六月や伸びきつてゐる藁の蛇
郭公やそろそろ帰らねばならぬ
梅雨の間の水平線や予約席
森古るや毛虫の羽化の矢継ぎ早
水芭蕉の沼へ続きぬ獣道
新聞を切りぬく音の梅雨湿り
ガス燈や小樽運河の夕薄暑
郭公や鉄路の音の遠くより
六月の夜のにぎはしき田んぼかな
子燕の巣立ちを名残惜しきとも
水溜り跳ぶか廻るか梅雨晴間
一人より二人はさみし梅雨の入
白川の流れゆるらか額の花
帽子取りて鳥居をくぐる涼しさよ
麦藁の金の束めく日暮かな
サングラスかけたる犬の巻尾かな

回峯の行者駆けゆく河鹿沢
操らるるごとががんぼの壁伝ひ
父の日や父亡きを子が父の役
憂きことの多き日なれど薔薇真紅
行きは踏み帰りは含み桜の実
夕立の真中ぼかんとグラウンド
餡を練るひと日卯の花腐しかな
黄菖蒲の濠へ影なす古墳かな
揚梅の樹の高みより土佐の海
落城の藩主の越えし遠青嶺
無学祖元禪師の端坐かつと夏至
太宰忌や用水潤れて名を残す
黒き犬大あくびする薄暑かな
梅雨寒やデモの末尾に傘さして
倒木をくぐりくぐりて登山かな
鏡像の上下転ぜず夏近し
大砲の音のありけり夏の富士
豊作の枇杷の実鳥と分かちけり
万緑や何処より来る滝の音
ががんぼの追はれし部屋のどんづまり

鴻坂 佳子
宮澤 淑子
渋谷 啓子
川内 一浩
中嶋 文子
西村みゑ子
佐々木 成
高橋キセ子
四宮 陽一
羽鳥 正子
酒井 富子
南田美恵子
中島 冬子
西五辻芳子
城島 千鶴
鈴木あるの
吉田多々詩
大石 高典
氷室集

栗本 徳子
鴻坂 佳子
河村 純子
朝田 玲子
川内 麻美
鈴木 春菜
高橋キセ子
宮澤 淑子
栗本 一代
佐々木 成
益子 桂子
中村 順次
大石 高典
小嶋 和
野木 正博
仁田 浩
宮原亜砂美
南田美恵子
鈴木あるの
川内 一浩

2019年8月

氷華集

* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

晩春の月がぼあんと海の上
河鹿鳴く岩を祀りし修験跡
バーボンの水割を飲む闇を呑む
次々と幼な泣かせて祭獅子
ほめられて稚児並びある仏生会
涼しさや子規庵句座の写生の図
村人の暮しの糧に蕨生ふ
焙炉師や常は庭師の顔を持ち
聞きなれし声が笥抱へ来る
薔薇に薔薇触れ薔薇園の円舞めく
教授室見下ろす枝に鴉の巣
鍵盤の指の躍動夏来たる
明日葉や島の古家に雨しとど
カルデラや墓の卵の乾く風
そのかみの河内木綿屋柿若葉
朝月の銀鈴めきて雪解富士
似顔絵師を見るとなく見てゐる薄暑
角石に堪ふる城趾五月晴
朝食は私の仕事豆の飯

氷壺集

伊藤 武敏
真下 章子
四宮 陽一
南田美恵子
益子 桂子
木村 静子
佐々木 成
中島 冬子
酒井 富子
高橋キセ子
大石 高典
中嶋 文子
城島 千鶴
羽鳥 正子
宮澤 淑子
鴻坂 佳子
川内 一浩
鈴木あるの
川上 和昭

氷室集

麦秋や電車一輛絵のごとく
餌用の蚯蚓飼ひゐる男の子
軒下に間借りのごとき雨蛙
方角の摺めぬ街や汗拭いて
街分かつ河岸段丘桐の花
父と子の声天井へ菖蒲の湯
うちの子と決め手迎ふる初蛭
葱坊主時刻表見るランドセル
なにはいばら咲く挿木して五年目に
新緑や平和の鳩と広島に
緑蔭の糺の森や鳥のこゑ
ありなしの風に鳴る絵馬青葉闇
朝買ひしバナナの房が夜は消え
母の日に母と歩むや石畳
一年生の朝のあいさつ靴揃へ

本多 智恵
藤本 隆子
中野 悦子
真下 章子
長浜 利子
鴻坂 佳子
前田 鈴子
山中ひでの
城島 千鶴
田中 勝
片山 旭星
森 すゞ子
小野塚佳代
小野塚久子
森 裕子

春風や玄武洞への渡し船
朝の光うけて蜥蜴の動かざる
河鹿鳴き瀬音一瞬消えしとも
たわわなる実を願ひみる柿若葉
人混みに気づきし葵祭かな

塚本 郁子
大野千鶴子
東 俊子
福地 義雄
鈴木あるの

2019年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

己が掌の蒲公英の絮君が吹く
ボレロめく仔牛の跳ねて牧開
きゆるきゆると刻みて母へ春キャベツ
春愁やおやつのやうに菓飲み
朝刊の無き日の暇よ百千鳥
芽柳やまだ休ませてある水車
猪牙舟の岸と呼びあふ遅日かな
寓居跡誰とも知れず雪柳
朧夜やブラックホールとふ写真
正門を飾る鳶の芽農学部
欲張れば友とはぐるる蕨採
つばくらめ無人駅舎を下見に来
かぎろひの浦の奥なるチャペルかな
春愁やひとり勤務の司書の昼
鈍行の軋み蛙の目借時
神木の枝の揺らぎや鳥交る
湯の花のさらりと溶けし啄木忌
山国に海豚の化石うららけし
三極を咲かせしづもる平家谷

川内 一浩
伊藤 武敏
中嶋 文子
遠藤 長代
酒井 富子
高橋キセ子
鴻坂 佳子
四宮 陽一
益子 桂子
城島 千鶴
南田美恵子
渋谷 啓子
西村 みゑ子
羽鳥 正子
真下 章子
佐々木 成
大石 高典
長浜 利子
木村 静子

氷室集

燕来る屋根に石置く蚕の村
画眉鳥に負けじと燕こゑを張る
逃水を追ひ越して行くポルシェかな
清明の水をとりこむ草木かな
廃村に蝌蚪の犇めく水のあり
取りあへず蒲公英に聞く道案内
眠さうな蛙畝ごと起こしけり
苔付けし水車が春の日をこぼす
毛づくろひされぬ猿をり春の昼

佐々木 成
長浜 利子
山本 真也
鈴木 春菜
福田 将矢
河村 純子
高橋キセ子
野木 正博
大石 高典

山野草食はれてしまふ春の闇
土筆煮るあれほどの嵩これほどに
藁や土のケーキに小花さし
色鉛筆無心に遊び子どもの日
逆打ちの遍路や金比羅宮の坂
尼僧らの声をとめめく野蒜摘み
花追うて天神川を五条まで
四月馬鹿こだはりてみてパン焦がす
折畳傘の小さし花の雨
川に沿ふ桜並木の蛇行せり
十返りの花や復元武家屋敷

羽鳥 正子
仁田 浩
山本 京子
中野 悦子
牛田あや美
朝田 玲子
中嶋 文子
川内 麻美
川内 一浩
渋谷 啓子
城島 千鶴

2019年6月

氷華集

* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

風神の袋からつぼ木の芽晴
川港の名残の杭や葦の角
日溜りに猫みる風の涅槃かな
句碑の辺の裏や表や落椿
春の草鋤き込む畑の土煙
上枝下枝音なく揺るる涅槃の日
別れ路のたびに迷ひて雪柳
手枕の仮寝と思ふ寝釈迦かな
復興の波止しろじろと涅槃西風
トンボロや背負籠かろく磯菜摘
レコードの針浮き沈み春深し
土筆とは命冥加と祖母のゑむ
午後に消ゆ比叡の山の春の雪
水送り火の粉に神の水垂らす
哲学の道への標雪柳
天神に竈社のあり臥竜梅
みちくさの子の手に余るつくしんぼ
山襷に狼煙のごとく杉の花
朝の陽を受けてたゆたふ石蓴かな

伊藤 武敏
佐々木 成
高橋キセ子
中嶋 文子
酒井 富子
益子 桂子
川内 一浩
羽鳥 正子
鴻坂 佳子
宮澤 淑子
木村 静子
中島 冬子
南田美恵子
吉田多々詩
四宮 陽一
城島 千鶴
遠藤 長代
長浜 利子
森 すゞ子

氷室集

犯人は春の鼯ぞ能舞台
画数の多し蛙の目借時
修二会果つ煤けし貌をふきて藝に

河村 純子
小嶌 和
栗本 徳子

曲屋の歳月負ひし土の雛
古墳より命いただく野蒜かな
菜の花の色濃く散りて母の家
しろかねの岳に真向ひ剪定す
今日おやき昨日てんぷら蕨の臺
半端なき象の放尿山笑ふ
蕨味噌の華ある香りかと思ふ
着任の挨拶のごと初音あり
けふはしも一声蕨の初音かな
遠き日の米に換はりし雛かな
春愁や展示に子規の幾何ノート
春雷や光向かうに幼き日
石垣の弾痕蛙の目借時
苗札を立てて媪の独り言つ
三月や子の新しき靴並べ
茎立の力いただく朝餉かな
倒木を遊びどころと百千鳥

佐々木 成
宮原亜砂美
鈴木 春菜
高橋キセ子
酒井 富子
川内 麻美
川内 一浩
長浜 利子
城島 千鶴
前田 鈴子
木村 静子
栗本 一代
山本 真也
真下 章子
山本 京子
渋谷 啓子
南田美恵子

2019年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

薬局の待合を分け流行風邪
地下牢は背丈の深さ春の塵
出来立ての風の秩父よ寒の朝
鳥獣の足跡あまた雪の寺
薔薇の芽に名のありリリー・マルレーン
ニン月やひびきやすくて竹の幹
風花の乱るる荒磯実朝忌
ニン月や疏水を濁し重機立つ
春寒し仔牛に厚き布を着せ
紀国へ香り十里の梅見かな
洛北へ残雪の嶺越えにけり
前列は実のなる木々や植木市
道真の無念のほどよ梅の花
ミシン踏む春のひかりを縫ひ込んで
海風ぐに鶯は声残しゆく
芍薬の芽のいろ雨後の土の色
春の闇ラ・カンパネラ弾くは誰
春の牡蠣日に日に太り締切日

中嶋 文子
羽鳥 正子
伊藤 武敏
佐々木 成
四宮 陽一
高橋キセ子
鴻坂 佳子
城島 千鶴
渋谷 啓子
中島 冬子
吉田多々詩
古川 邑秋
鈴木あるの
真下 章子
西村みゑ子
酒井 富子
西五辻芳子
大石 高典

棟上げの空晴れわたり春隣

益子 桂子

氷室集

湯拭きせし馬のまつげや風光る

朝田 玲子

竹馬の大人の高さ子の高さ

鈴木 春菜

音もなく何ごともなく椿落つ

栗本 一代

雪国に生きて降る雪また恐れ

佐々木 成

薄氷や吾児抱く母の回り道

三原真紀子

骨格標本小顔なるかな春近し

仁田 浩

鳥帰る藻畳のみがしづかなり

山本 京子

ニヶ月やジャズに各国語の集ふ

中嶋 文子

身体の約七割が春の水

山本 真也

焙烙の文字の幼さ節分会

栗本 徳子

うららかや眼鏡の度数うたがうて

吉田 達哉

はじめての「ぼく」のひとこと春隣

鈴木さやか

立春の山影かくれなく展け

羽鳥 正子

力抜くも力のひとつ椿落つ

中野 梓

焙烙になぐり書きめく厄払

宮原亜砂美

踏絵無き国や春日に牛を引く

鈴木あるの

綾取やセーターいまだ未完成

中野 悦子

忘れ鎌出できし錆の雪間かな

高橋キセ子

春疾風荒神橋を駆け抜くる

大石 高典

立春の風と競ひて走りけり

吉田多々詩

2019年4月号

氷華集

* 当月の雑詠から尾池和夫 抄出

氷壺集

寒鯉の重なり沈む水の黙

高橋キセ子

入道のやうなる漁師冬の雷

伊藤 武敏

而して齒の痛みだす小晦日

鴻坂 佳子

革命に遭ひたるゲームお正月

中嶋 文子

寒卵茹でれば重くなりしとも

川内 一浩

初富士や領巾ふるごとき雲のたち

宮澤 淑子

女正月膳に若狭の笹かれひ

中島 冬子

玲瓏とかがよふ大河年新た

佐々木 成

太陽の塔によつきりと冬晴間

城島 千鶴

松の内過ぎて音なきおもちや箱

山中ひでの

亡き画家の絵に力得る初暦

大石 高典

七歳に七種粥を言ひ伝へ

田崎セイ子

お降や言霊といふ力欲し

西五辻芳子

一灯のゆるるがごとし独楽の果て
見定めてどんど盛るを引き倒す
読み札の姫の一枚失せてをり
上州の風に切干し仕上がりぬ
釣舟の舳ふ深川年暮るる
鳥どちの見えずしんしん雪の空

吉田多々詩
羽鳥 正子
木村 静子
長浜 利子
四宮 陽一
酒井 富子

神遊びせむと帯締め男衆
紙を漉く吉野の水は凍らざり
人の訃に雲のとどまる寒暮かな
ありふれし朝にて福来雀かな
幽閉に似し古里の雪の朝
離陸後の余韻にみたり薺粥
八幡宮に松籟深し実朝忌
鳳凰の雲生す空やお元日
森昏し獣を見張る尾白鷺
牡蠣焼や世間話も網の上
佳日なり手編みマフラー巻いて出る
カザルス鳥の歌聴く春の空
笹鳴や神宮林に日の差して
神主と僧待つならひにて四日
冬の虹仰ぐや祈りとどけむと
厳冬や火を恐れざる猿のみて
若菜摘む堰の田水の光りけり
寒雷の一度つきりや鍋煮立つ
冬ぬくし手術の痕に掌をあてて
冬ひと日白湯に始まり白湯に終ふ

氷室集
河村 純子
小嶌 和
高橋キセ子
三原真紀子
川竹 美樹
朝田 玲子
宮澤 淑子
城島 千鶴
佐々木 成
田崎セイ子
吉田多々詩
山本 京子
森 すゞ子
酒井 富子
川内 一浩
宮原亜砂美
遠藤 長代
鴻坂 佳子
仁田 浩
中井 昭雄

2019年3月号

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

磐梯の山塩効かせ冬至粥
火事跡を喰ひ尽くすかにショベルカー
雪吊が空へ伸び切る城址かな
浄財箱抱へ来る僧冬木立
雪千トン室に蓄へ酒造り
鯉あげの売手買手や大焚火
小春日の腹ふくよかに藁の牛

氷壺集
伊藤 武敏
中嶋 文子
佐々木 成
鴻坂 佳子
遠藤 長代
城島 千鶴
高橋キセ子

罪なくも括られてあり冬の菊
戒壇廻り冷たき錠にゆきあたる
囲炉裏火に馬が顔出す夕餉かな
海風を捉へ乾鮭うらがへす
犬の墓従へ冴ゆる王墓かな
冬眠の主起せしか庭掃除
暮早し列車待つ間の椅子硬き
愛犬に皮の雪沓老獵師
お迎への母待つ幼ナ暮早し
これからも良き師であらむ日記買ふ
年の瀬の目覚まし時計午前五時
鬼瓦黒く濡らして冬の雨

山中ひでの
宮澤 淑子
西村みゑ子
羽鳥 正子
木村 静子
中島 冬子
渋谷 啓子
大石 高典
益子 桂子
吉田多々詩
真下 章子
四宮 陽一

気嵐や動かぬ鮭の流れゆく
越前の広野に低く冬の雁
囃子方去りて火鉢の尉残る
風紋の轟きたてる冬の浜
綿菓子に顔うづめたき小春かな
髪置の儀式知らずに鬘ゆはれ
お念仏立ちしまま聞く大根焚
憧れは犬とペチカのある暮し
ずつしりと銀杏落葉の袋数
極月の渋のしみある指の先
霜除の藁をついばみ雀どち
荷車に南瓜とこども感謝祭
ダヴィンチの絵の捨てられず古暦
除夜の鐘生きねばならぬから生きる
短日や菓のむこと忘れみて
行けば行くほど雪催なれど行く
短日や暮るる事のみ確かにて
こはごはと抱くうさぎの鼓動音
毎年よ寸をたがへず餅を切る
山裾を長き貨車ゆく十二月

氷室集
宮澤 淑子
栗本 徳子
河村 純子
佐々木 成
栗本 一代
西五辻芳子
城島 千鶴
川内 麻美
鈴木 春菜
高橋キセ子
羽鳥 正子
鴻坂 佳子
山本 京子
小嶋 和
森 すゞ子
山本 真也
川内 一浩
荒木 昭代
長利 子
真下 章子

2019年2月号

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

十日干し十日の縮み吊し柿

氷壺集

高橋キセ子

高台院の情念のごと冬の月
冬三日月氷河の際に石の家
象潟や大きくかかる冬の虹
雨雲に帰路急かさるる吊し柿
溶岩の崩落の跡ななかまど
極楽の輝きと見ゆ寒夕焼
綿虫の届かぬみ空ありにけり
山の色は雨に変わりし鴟のこゑ
ブータンの数珠つまぐるも暮の秋
どんぐりの三度弾んで谷の底
山かぶらどれをとつても違ふ貌
紅葉且つ散る鬼太郎の港町
講釈のやたらくはしき菊花展
師逝くや百舌鳥の高音を一入に
雪吊に緩みほどこす庭師かな
神鷄の檻に舞ひこむ落葉かな
天守跡を掌中にして紅葉山
連峰の山肌見ゆる寒さかな

弔文の筆の途切れる寒夜かな
火影さす神楽の笛の嫋々と
七人の小人のボスは雪女郎
小石にて描くけんけんば夕紅葉
稲刈りや株握る手に覚えあり
新米は雪の香のして炊き上がる
喪の家を風吹き抜けて木守柿
熱爛や母も酔ひたき夜がありて
有明の月と並走舞鶴へ
冬ぬくし北京に来しと思はれず
宜蘭なり冬田に水の張られあり
新調の長靴軽し赤のまま
冬の朝二人の卓に皿二つ
小春日や黒板塀に醬の香
鳩のゐて波の騒ぎのなかりけり
初氷なれど厚きを掲げ見す
雪女郎と思ふ無言の電話切る
塗香して写経する窓紅葉映ゆ
蜜蜂のダンスここよと枇杷の花
田より立ち山端にかかる冬の虹

伊藤 武敏
鴻坂 佳子
佐々木 成
中嶋 文子
川上 和昭
吉田多々詩
川内 一浩
羽鳥 正子
西村みゑ子
中島 冬子
大石 高典
四宮 陽一
南田美恵子
友永基美子
遠藤 長代
木村 静子
渋谷 啓子
真下 章子

氷室集

佐々木 成
栗本 徳子
山本 真也
川内 麻美
野木 正博
鴻坂 佳子
栗本 一代
三原真紀子
石原ゆき子
鈴木あるの
小嶋 和
古川 邑秋
川内 一浩
宮澤 淑子
吉田多々詩
高橋キセ子
西五辻芳子
中村 順次
宮原亜砂美
渋谷 啓子

2019年1月号

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫 抄出

地虫鳴く昭和支へし炭坑に
どんぐりに追ひ越されたる坂の道
さらさらと升をあふるる今年米
身に入むや犇めき祀る陶狐
十あれば十の音色にひよんの笛
尊皇の二文字の塾や露しとど
旅の地図閉ぢて拵げて秋の空
古里がにはかに恋し雁の空
翡翠の朝の声あり伊豆の宿
炉話に身をのりだして夜の深し
古墳よりふはりと出でし秋の蝶
畑越しや籠の茸をひと掴み
虫すだく真闇のさきの地藏堂
紙袋の折目きつちり今年米
木の実割る鴉の智慧をまのあたり
キリマンジャロその裾野なる翺雲
山鳩のこゑのくぐもる後の月
秋寂ぶや秩父事件を読む札所
北国の稲架眺むるも母はなく

氷壺集

伊藤 武敏
中島 冬子
高橋キセ子
森 すゞ子
羽鳥 正子
川上 和昭
益子 桂子
佐々木 成
城島 千鶴
遠藤 長代
四宮 陽一
鴻坂 佳子
宮澤 淑子
渋谷 啓子
木村 静子
大石 高典
西五辻芳子
酒井 富子
立石 律子

氷室集

木の実置く掌は百歳の温みにて
黒猫が前肢縮め十三夜
ただいまと母に戻る日天高し
父逝きし霎時施候に
鴨川に白き朝来て白き息
紙飛行機追ふ少年や翺雲
八瀬の地の切子燈籠揺らぎゆく
台風が過ぎしころなり夕御飯
コスモスやビオラ抱へて少女来る
穂を撫でて粳種の株選びけり
行く秋や五指なめらかに鶴を折る
オブラートの厚さ気になる鴝日和
でんと置くおぼけかぼちやを門番に
アンパンマンのあ音の響き小鳥くる

東 俊子
三原真紀子
河村 純子
山本 京子
小嶋 和
栗本 一代
栗本 徳子
鈴木 春菜
佐々木 成
中村 順次
吉田多々詩
羽鳥 正子
西五辻芳子
鴻坂 佳子

日暮なほ靱磨小屋に声のあり
やや寒にやや驚きの南予かな
ひとところ夕日離れず石露の花
小鳥来る白きノートに子の手形
段取りの半ばを釣瓶落しかな
流木をダム湖に寄する野分かな

酒井 富子
鈴木あるの
高橋キセ子
宮澤 淑子
前田 鈴子
古川 邑秋